Lyrical NANOHA The Lord　～契約せし魔法使い～

vegatair

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「私と契約して、魔法使いになってください！」

ある日、一人の青年とファントムの少女が契約し共に戦うこととなる。

人とファントム。その垣根を越え、本物の絆を手にすることはできるのか。

そして戦いの先で青年が、少女達が見つけ出したものとは。

――これは絆の織り成す物語。

＊この作品はオリジナルライダーが主人公となります。

そういったものが苦手だという方は注意してお読みください。

目　次

プロローグ　／Ｓの始まり　1
出会いと契約と初変身　7
戦闘終了とこれから　24
説明と買い物　35
狙われた少女達　47
通りすがりの魔法使い　58
何でも屋へＧＯ！　71
繋ぐ手　82
取引　96
騎士の力　109

プロローグ　／Sの始まり

「はぁっ、はぁっ……くっ！」
　深い深い闇の中、暗い暗い森の中を駆ける一人の少女がいた。服は所々が破れ、その下から覗く柔肌には無数の傷が走っている。
　いったい何から逃げているのであろうか、少女は時折振り返り背後から迫るその何かの存在を憎々しげに睨む。
「ひゃははは っ、逃げても無駄だぜぇ？」
　陽気な……いや、妖気なと言い表したほうがいいか。深い闇の中、遠くから聞こえてきたのはそんな男の笑い声。そして徐々に、だが確実に自分へ迫ってきているとわかる足音。
　だが少女は動かす足を決して止めることはしない。ここで止めてしまったのなら、それはすなわち自分の死を意味するからである。
　だからこそ少女は懸命に森の中を駆けるのだが
「ぅぅぅぅぅ……」
「ぅぉぉぉぉぉぉ……」
　低く、まるで知能を持たない獣のような唸り声とともに少女の前に複数の人影が姿を現す。
　道を塞がれたことで少女は走る足を止め、眼前の影を睨みつける。
「グールッ！」
　体が石のように罅割れ、灰色の鬼のような姿をした異形へ少女はそう言い右手を前にかざす。すると少女の右手に淡い白の光が収束していき
「はぁぁぁぁっ！」
　少女の掛け声とともに右手から放たれる光。その光はグールと呼ばれた灰色の異形達へと向かい直撃、眩い光がグール達を包む。
「ヴォォ!?」
　光に包まれたグール達はそのまま霧散するように消えていく。道が開けたことで再び走り出そうとした少女だったが
「――っッ!?　ゴホッ、ガハッ……はぁっ、はぁっ……」

突如動機が激しくなり、少女は胸を押さえ苦しみ始める。肩は激しく上下し、右手に集めた光もすでに消滅している。
「魔力、が……足りな、い」
胸を押さえ、激しくなる動機を落ち着かせる少女。だが彼女にはそんな余裕などなかった……なぜなら
「よぉ、随分と苦しそうじゃねえか」
「――っ！」
背後から聞こえてきた声に少女は急いで振り返る。するとそこにいたのはヘビやトカゲといった爬虫類を思わせる頭部に、ゴツゴツとした手足には鋭い爪、そして背中から生える一対の翼を持った異形。
「ガー、ゴイル……っ！」
「よっ」
ガーゴイル、そう呼ばれた異形はヒラヒラと手を振り少女へと近づく。少女は逃げようとするも、まだ動悸が収まらず立ち上がることができなかった。
そして少女の眼前まで来たガーゴイルは、その鋭い爪を少女の首元へと持って行き低い声音で問う。
「さて、これで鬼ごっこも終わりってことだしよぉ。ちゃっちゃと吐いてもらおうか……賢者の石のありかをよ」
賢者の石。万物を金に変える、あるいは不老不死を手に入れることができると言われる秘宝中の秘宝。
その居場所を教えろと言われた少女は、ガーゴイルを睨みつけたまま
「嫌です」
一言だけ、ただそう言い拒否する。するとガーゴイルは首元に持って行っていた右手を引き――少女の腹を思いっきり殴りつける。
少女の体は宙を舞い、少し離れた地面へ体を叩きつける。
「優しくしているうちに言ったほうが身のためだぜ？　次はもっと加減が効かねぇかもしれねぇからよ」
「ガッ……カハッ、ゴホッ！」
腹部を押さえ苦悶の表情を浮かべる少女。そんな少女へガーゴイ

ルはもう一度質問をする。
「もう一度聞くけどよ、賢者の石のありかはどこだ？」
「ハッ、ハッ……言い、ません」
少女の体はかなりの激痛が襲っているはずだ。だというのに少女の瞳に宿る強い意志は決して揺らぐことなく、まっすぐにガーゴイルを捉えている。
二度目、拒否されたガーゴイルはというと
「そうかよ……だったら正直に話すまでじわじわと甚振（いたぶ）ってやんよぉ！」
右手に石でできた身の丈ほどの斧を出現させ、ゆっくりと少女へ向かって歩き出す。
（言うもんか、絶対に……たとえ手足を捥（も）がれたって、言うもんか！）
少女も心の内で覚悟を決める。そして再び少女の眼前に来たガーゴイルは、その巨大な斧を振り上げ
「まずは……その右足を叩っ斬ってやんよぉ!!」
少女のか細い右足へ躊躇なく振り下ろす――その直前
《チェイン・ナウ》
突如聞こえてきた低い機械的な声。すると少女の頭上を白い光の線が数本通過し、斧を振り下ろそうとしたガーゴイルを襲う。
「なっ!? グァァァァ！」
突然の攻撃に完全に虚をつかれたガーゴイルは、もろにその一撃をくらい後方へ吹き飛ぶ。
いったい何が、少女が痛みを我慢して体を起こすと、その瞳に映ったのは――全身を白いローブで包んだ仮面の人物だった。
「……無事か？」
「あ、はい！ その……ありがとうございます」
仮面の下から聞こえてきたのは低い男の声。仮面の男は少女の元まで近づくと、徐（おもむろ）にその右手をとる。
「どうやら魔力が尽きかけているようだな。少しだが、私が分けてやろう」
そう言うや否や、仮面の男は少女の右手に一つの指輪をはめる。そ

してそのまま彼女の右手を自身の腹部、そこにあった黒い手形が施された機械的なベルトへと持っていくと

《プリーズ・ナウ》

先ほどの機械的な音で今度は別の言葉が流れる。かと思ったら、右手を通じて少女の中に何かが流れ込んできた。

「これは、魔力……？」

「……これで数日は大丈夫だろう」

男は少女の右手を腹部から離す。すると流れ込んできていた魔力の供給も止まり、少女は魔力が戻ったことにほっと安堵の息を吐く。

「テメェ、よくも他人（ひと）の邪魔をしてくれたな、ええ!?」

すると少し離れた場所で、斧を構えたガーゴイルが男へ向けて怒りの籠った声でそう告げる。そんなガーゴイルの言葉を無視し、仮面の男はローブの中からあるものを取り出し少女へと手渡す。

「……これは？」

少女が手渡されたものは男のとは少し違う、中央に白い手形の意匠が施された機械的なベルト。それと少女の右手にある指輪と同形状のものが九つ。

突然こんなものを手渡された少女は、疑問の視線を男へ向ける。

「……このベルトの適合者を見つけることだ。さすればお前の心強い味方となってくれるだろう」

「適合者？　味方？……それってどういう」

「他人を無視して話をしてんじゃねぇよ!!」

少女の言葉を遮り、声を荒げながら男へ斬りかかるガーゴイル。だが男は冷静に石の斧をいなし少女へ話を続ける。

「契約をしろ、ということだ」

「契約って、どうすればいいんですか!?　それに、適合者なんてどうやって見つければ」

「おらおらおら、ごちゃごちゃとくっちゃべってる暇なんかねぇだろうが!!」

ガーゴイルは斧を振り回すが、仮面の男は左手一本でそれらを受け流しながら、右手に新たな指輪を装着し懐へと持っていく。

《エクスプロージョン・ナウ》
再び鳴り響く音声。そして男が右手でガーゴイルの腹部に掌底を喰らわせ、ガーゴイルは再び後方へ吹き飛ばされる……だけではなく
――ドォォオオオン！
吹き飛ばされたガーゴイルが突如、巨大な爆発に飲み込まれる。仮面の男は爆炎を一瞥し、少女へと顔を向けると
「願え。その程度の願いなら、容易に叶えてくれるだろう」
「でも……私はどこに行けばいいのか……。このがどこかすらも、私にはわからなくて」
「……右手を貸せ」
男の指示に従い、少女は再び右手を差し出す。すると男は少女の指にはめられた指輪を外し、今度は別の指輪を装着させる。
「いいか、何事も一人で解決しようとするな。助けを乞うことに引け目など感じないことだ」
そう言い、再び右手をベルトの手の部分へと当てる。
《テレポート――》
「っ！　あ、あの！」
テレポート。その言葉を聞き、少女は慌てて男を呼び
「貴方は、いったい何者なんですか!?　どうして私なんかを助けてくれたんですか!?」
「……私が誰かは言えない。それと助けたのはその方が都合が良かったから、ただそれだけだ」
淡々とした口調で話す男。だが少女はそれでも助けてくれた目の前の彼に向けて、精一杯の笑顔を浮かべ
「それでも、助けてくれてありがとうございました！」
《――ナウ》
少女の視界が徐々に光に包まれ、男の姿が消えていく。そして完全に光が視界を覆い尽くし、そこから数秒後。視界を覆っていた光の輝きが淡くなり、ついには完全に消え去る。すると少女が立っている場所は先ほどの森の中ではなく、建物に囲まれた街の中だった。
幸いなことに周りに人気がなかったので特に騒ぎになることはな

く、少女は手に持ったベルトと指輪へ一度視線を落とし、それらをぎゅっと握りしめ

『――このベルトの適合者を見つけることだ』

『――契約をしろ、ということだ』

仮面の男の言葉を思い返す。いったいその言葉が何を意味しているのかはまだ分からないが、それでも彼の言葉を信じてみようと少女は歩き出す。

目指す先はベルトの契約者の元。そんな彼女の行く先を祝福するかのように、月明かりが優しくその道を照らす。

そして数日後、この少女の運命は大きく変わることとなる。

そしてそれは、ある一人の青年の戦いの始まりでもあった。

出会いと契約と初変身

『昨日未明、ミッドチルダの北部にて魔導師が一名謎の失踪をとげました。これで失踪した魔導師は８名に登り、管理局は魔力を持った者への注意を促しました』

「……ふ～ん。なんだか最近は物騒だねぇ」

テレビから流れるニュースを見ながら、興味がなさそうな声音でそう呟く男。彼の名はトオル・ミツハネ、今年で２１になるごくごく普通の青年である。

現在、彼は一人暮らしているアパートにて朝食を食べている最中だ。焼きたてのトーストにマーガリンを塗り、テレビに視線を向けたまま一口齧(かじ)る。

するとピンポーン、とインターホンが鳴る音が聞こえ、何事かとトオルが玄関へ向かい扉を開くと

「おっはよートオル兄(にい)！」

元気な挨拶とともにドン、という衝撃がトオルの腹部を襲う。突然のことにトオルは受け身を取れず、そのまま後方へ背中を強打させる。

背中に走る痛みを我慢しつつ、トオルが目を開けると視界を覆い尽くす青がそこにはあった。

またか、と心の内で溜息とともに漏らしながら倒れた元凶へと声をかける。

「おはようさん。でもな、いきなり抱きつくのはやめろって言っただろ……スバル」

「えへへ～、ごめんね～」

ちょこんと舌を出し、可愛らしい顔で謝るスバルと呼ばれた少女。彼女はスバル・ナカジマといい、トオルの知人にして妹分のような存在である。

そんな可愛い妹分に謝られては許さないわけにもいかず、トオルはスバルから体を離すとよっこらせっと起き上がる。

「にしても、お前と会うのも久しぶりだな」

「訓練校を卒業してすぐに部隊に入ったからね～」
　あはは～、と笑いながら頭を掻くスバル。
「どうだ、部隊での調子は？　いつもみたいに馬鹿はしてないだろうな？」
「もう、私だって成長してるんだよ！　いつまでも子供扱いしないで！」
「ははっ、そうかそうか悪かったな。でもな、出来の悪い妹分を持つと兄貴は心配なんだよ」
　屈託無く笑いながらトオルはスバルの頭をガシガシと撫でる。その行為自体が子供扱いしてるんだよと思いながらも、こうやって撫でられるのも悪い気はしないスバルはトオルのされるがままでいる。
「それにしても、あの泣き虫だったお前が魔導師になぁ。しかもCランク……いや、今日でBランクか」
「あれ？　なんでトオル兄、私が今日昇格試験受けること知ってるの？」
「ゲンヤさんから聞いたんだよ。ここだけの話だけどな、お前がちゃんと昇格できるかってかなり心配してたぞ、あの人」
　トオルの話を聞き、スバルは頬を膨らませムッとした表情を浮かべる。
「もう、お父さんまで私を子供扱いして！」
「そう怒るなって。親っていうのはいつだって子供が心配なんだよ」
　そう言い、今度は優しい手つきでスバルの頭を撫でる。目の前にいる少女はもう、自分の助けなどいらないほど、いやむしろ自分を守るほどにまで成長し強くなったのだ。
　愛すべき妹分が成長したことに、嬉しさと若干の寂しさがこみ上げるトオル。そして僅かな不安もまた、同じようにこみ上げてくる。
　魔導師として部隊に入るということは、必然的に危険な任務に就くことになる。まだ魔導師になったばかりで、しかも年齢的にも若いスバルが大怪我をしないか心配なのだ。
　それにここ最近起こっている魔導師失踪。先ほどのニュースは他人事で聞き流してはいたものの、その実かなり気にしていたのであ

る。
「スバル、無茶だけはするんじゃねぇぞ？　ダメだって時には俺を呼べ、いいな？」
「大丈夫だって！　それに私はもう、トオル兄よりも強くなったんだよ。だから今度は私がトオル兄を守ってあげるよ！」
「……そうか、それは心強いな。けど約束はしてくれ、絶対に無茶はしないってよ」
　そう言ってトオルは右手の小指を立て、スバルの前へ持っていく。スバルは少し不満に思いながらも、自身も右手の小指を立ててトオルの小指と絡ませる、所謂『指切りげんまん』をする。
　そして指を離し、トオルがチラリと壁に掛けてある時計に目を向けると、時計が示す時間は９時３０分。
「……おいスバル。お前、試験の受付完了時間は何時だ？」
「えーと確か……１０時だったっけ？」
　……まずい、これはかなりまずい。あと３０分しか時間がない。もしも遅れてしまえば次に試験が受けられるのは約半年後。スバルの実力ならば合格は出来るだろう。だがそれは試験を受けなければ何の意味もなさない。
　たらりと、トオルの頬を汗が伝う。
「あと３０分しかねぇじゃねぇか馬鹿野郎!!」
「え――わわわっ、本当だどうしよう!?」
　言われて初めて気づいたらしく、あたふたと慌てふためくスバル。
「落ち着け、俺が試験会場まで送ってやる。ぶっ飛ばせばギリギリ間に合いはするだろうしな」
　そう言い、トオルはさっと着替えを済ませアパートの駐車場へと向かう。そこには黒塗りの大型バイクが停めてあり、トオルはヘルメットを二つ取り出すと片方をスバルへ投げ渡す。
「おら、さっさと乗れ！」
「ごめんね、ありがとうトオル兄！」
「礼は間に合ってからだ！　それよりもちゃんと掴まってろよ――振り落とされても知らねぇぞ！」

スバルを後部座席へ乗せ、トオルは目一杯のスピードで試験会場へと向かう。

結論から言って、スバルは間に合った。とは言っても本当にギリギリで、あと数分遅れたらアウトだっただろう。
「この馬鹿スバル!! あれほど余裕を持って来いって言ったでしょ!?」
「ごめんってばティア～。でも間に合ったから結果オーライでしょ？」
「そ・れ・は！ トオルさんが送ってくれたからでしょ！」
ガミガミとスバルへ説教を垂れるのは、彼女と訓練校のときからコンビを組んでいる少女ティアナ・ランスターである。
ティアナはそのオレンジのツインテールが逆立つほどの怒りを露わにし、スバルへと詰め寄っている。
「ったく……トオルさんもありがとうございました。わざわざ試験会場まで送ってもらって」
「ああ、気にしなくていいよ。それよりもそのままスバルに説教を続けててくれ」
「トオル兄!?」
試験前だというのに、そんな緊張感のかけらもないやり取りをするスバル達。
そして試験の説明時間も近づいてきたらしく、三人の前に受付のスタッフが近づいてくる。
「間も無く試験会場への入室となりますので、どうぞ中へお入りください」

「わかりました。行くわよスバル。トオルさんも、ありがとうございました」
「行ってくるねトオル兄！」
「おう、帰ったら昇格祝いだな」
　互いに手を振りあい別れるトオル達。スバルとティアナの姿が建物の中へと消えるまで見送り、トオルは駐車場へと向けて足を進める。
　そんなトオルを建物の陰に潜み見つめる人物が一人いることに、彼自身はまだ気づいていなかった。

「さて……スバル達は無事に合格できるかねぇ？」
　駐車場へ着いたトオルは、バイクからヘルメットを取り出しながら、今頃は試験を受けているであろうスバル達の心配をする。
　スバルにおっちょこちょいな面がある分、もしかしたらということもあるだろう。
「いやいや、ティアナちゃんが付いているから大丈夫か」
　しっかり者の彼女が付いているのだ、絶対にとは言い切れないが大丈夫だろう。そう結論づけ、トオルがヘルメットを被ろうとした瞬間
――ドンッ、という衝撃と共にトオルの体が前のめりに倒れる。
　何事かと、トオルが体を起こし振り返るとそこには、自分の足へ乗りかかるようにして倒れこむ一人の少女がいた。
「……やっと、見つけました」
「……はい？」
　ふらりと、まるで幽鬼のごとく立ち上がる少女。その異様な雰囲気にトオルはわずかに後ずさる。
　そして数秒、だがトオルにとっては1分にも感じられる長い長い数秒が経過した後、少女は懐に手を突っ込む。
（まさか凶器か!?）
　トオルはすぐに身構え、少女の次の行動に備える。
「――あなた」

そう言い、少女は懐から何かを取り出す。それは白い手形のようなものが付いた変なベルトだった。
（なんだ、あの変な……ベルト？）
トオルが不審そうな目をそのベルトに向けると、少女はそのベルトをトオルの眼前へ差し出し
「私と契約して、魔法使いになってください！」
頭を下げ、そうお願いしてきた。急にそんなことを言われたトオルはというと、目を丸くし口をあんぐりとさせ一言。
「……へ？　魔法使い……？」

「クソが、あの女！　絶対に逃がさねぇぞ！」
とある場所で、一人の男が苛立った表情で叫んでいる。
「この近くに反応はあるんだ。さっさと見つけて甚振ってやるぜ」
そう言い、男はどこかへと向けて足を進める。そんな男の手には、身の丈ほどの石斧が握られていた。

なんだこいつは。それがトオルの抱いた感想だった。急に人を押し倒し、何か見知らぬベルトのようなものを取り出し。極め付けは契約して魔法使いになれだ。
トオルは目の前の少女へ疑惑の目を向け――目を見開いた。
「……お前、その傷はどうしたんだ？　それに服もボロボロじゃねぇか」
そう、少女の着ている白のワンピースはボロボロで所々が破け、そ

の隙間からは幾つもの切り傷が覗いていた。
だが少女はそんなもの知ったことではないと、トオルへ再度お願いする。
「お願いします、私と契約してください！　魔法使いになってください！」
「待て待て待て！　急に契約てくれだ魔法使いになってくれだ言われてもわかんねぇよ。せめて少し説明してくれ」
なぜ目の前の少女が自分へそんなことを言ってくるのか。一先ずそれを知るためにトオルは少女へ説明を求める。
トオルの言葉を聞き、少女は顔を上げるとその小さな口を開く。
「……ある人に言われたんです。このベルトの適合者を見つけて契約しろと。そうすれば私の助けになってくれると」
「適合者って、俺じゃなくちゃいけねぇのか？」
「はい。貴方がこのベルトを使うに値すると、そう感じたので」
そして少女は再び頭を下げ、トオルへお願いする。
「お願いします！　私と契約を……私を助けてください！」
「助けてって言われてもなぁ……」
別に助けること自体は構わないのだが、契約をしてくれと言われたら答えづらくなってしまう。
「……ひとまず場所だけ変えるか」

場所は変わり人気のない公園。ここならば多少声が大きくても誰かに聞かれる心配はないだろうと、トオルは少し古びたベンチへと腰をかける。
「それで助けてくれってことだが、いったい誰に追われてるんだ？」
「……私を追っているのはファントムという怪人です」
「ファントム……？」
初めて聞くその言葉にトオルは首を傾げる。
「ファントムとは絶望した人間から生まれる怪人です」
「人が怪人にだと？　そんなことがあり得るのか？」

信じられないと、そんな声音で少女に問うトオル。人が怪人になるなどと、そんな話は今まで一度も耳にしたことがない。
「はい。とは言っても、ファントムになり得る可能性がある人物は少ないので、話自体を聞いたことがなくても仕方ありません」
少女はそういうが、トオルは未だに半信半疑のままでいる。やはりそういった類のものは、自分の目で見ないと信じられないものなのだ。
「まぁファントムの話はそこまでいいとして。じゃあ次の話に移るが、なんで嬢ちゃんはそのファントムに追われてるんだ？」
「……賢者の石の在り処を知っているからです」
「賢者の石だと？」
これはトオルでも知っている。賢者の石、それは人知を超越したあらゆる超現象を引き起こすことができる奇跡の石である。
ただしそれはおとぎ話の中だけの話だと思っていたが、まさか本当に存在するとはと驚きを隠せないトオル。
「賢者の石は、古くから私の家に伝わってきた秘宝でした。でもある日、賢者の石を狙ったファントムが襲ってきて……父さんと母さんをっ！」
そこで言葉を切る少女だったが、トオルにはその先が想像できた。おそらく少女の両親は怪人の手によって……。
おそらく目の前の少女は両親のおかげで逃げ出すことができたのだろう。そしてファントムは石の在り処を知っている少女を追っていると考えるトオル。
「……なるほどなぁ」
トオルは腕組みをし、今までの話を整理する。魔法使い、ファントム、賢者の石……どれもこれも自分には過ぎた話である。正直関わらないことが一番の得策だとは思うが、追われているという少女に助けを求められてそれを無視というわけにもいかない。
黙り込んだトオルに、少女は不安な表情で問いかける。
「やはり、信じてもらえないでしょうか……」
「いいや信じてるぞ。でもこっちにも色々あってだな……まず俺は魔

力がこれぽっちもねぇんだ」
「魔力がない、ですか……？」
首を傾ける少女にトオルは首を縦に降る。
事実、トオルには魔力といったものが欠片もない。魔法文化が発達しているだけあってミッドチルダには魔力を持つものが多いが、それでも全員が全員魔力を有しているわけではないのだ。その一人の中にトオルも含まれている。
魔法使いというならば魔力があることが大前提となるだろう。つまり、トオルは彼女のいう魔法使いになる資格がないと言える。
「魔法が使えないなら魔法使いとはいえねぇだろうし、残念だけど他の魔導師を当たってくれや。それまでだったら面倒くらいは見てやるからよ」
追ってから助けることはできないが、生活を援助してやることはできる。ちゃんとした魔法使いの資格を持つものが現れるまでは面倒を見ようと、トオルがそう言うが
「でも、あなたから適合反応が出ているんです！」
この少女、是が非でも引く気がないらしい。そして少女は名案が浮かんだとばかりに、手を合わせると
「それではこのベルトだけでも着けてみてください！　もしも本当に適合者ではなかったなら、なにも起こらないはずですし」
あれやこれやという間に、少女に捲(まく)し立てられベルトを持たされるトオル。
いったい何が悲しくて、こんなわけのわからないものを着けなければならないのだろうか。トオルは内心でため息を吐く。
（ま、これで白黒はっきりすることだし、手っ取り早くていいか）
そんな楽観的な考えでトオルはベルトを腰に巻きつける。だがしかし、トオルには何の変化も見当たらない。トオル自身もどこか変わったということはなく、体調もいたって普通の状態だ。
「ほらな。やっぱり俺じゃだめなんだ――」
《ロード　エントリー》
「――よって……は？」

突如、ベルトから機械的な音が鳴り、まさかと顔をヒクつかせるトオル。
対照的に少女はキラキラと目を輝かさせ、歓喜の声を上げる。
「ほらほら、やっぱりあなただったんですよ！」
「いやいやいや、これ何かの間違いだから！　きっと何か変なスイッチを――って、これ全然外れねぇんだけど!?　ちょ、外し方とか知らない!?」
「へ？　外れないんですか？」
「外れないんですかって、まさか何も知らねぇのか!?」
可愛らしく首を傾ける少女へ、トオルはベルトと格闘しながら激昂する。それにしても本当に外れないベルトだ。
「おいおい、マジで外れねぇんだけど!?　もしもずっとこのままだったら、俺はこの先どうやって洋式便所でことを済ませればいいんだよ!?」
「ベルトを渡した私が言うのはなんですが、心配するのはそこですか？」
もっと別に心配することがあるだろうに、と少女が若干ずれた発言をしているトオルに突っ込みを入れる。
「ですが、これで条件は満たしました！　後は私と契約をするだけですね！」
それはそれこれはこれと、少女はトオルへ契約を申し入れる。結局トオルはベルトを外すことはできず、ガックリと項垂れながら低いトーンで聞き返す。
「一応聞いてやるけどよ、契約ってどうするんだ？」
「……わかりません」
「はぁ!?」
少女の返答に思わず叫んでしまうトオル。だがそれも仕方のないことだろう。契約しようと言われ、外れない呪いのベルトのようなものを付けられた上、契約の方法を知らないときたのだから。
「おいおい冗談じゃねぇよ！　なんで契約の方法知らねぇの!?　ちゃんと用法を確認してから頼んでくれよ！」

「し、仕方ないじゃないですか！　私だってこれがなんだかわからないのに、説明されないまま渡されたんですよ!?」
「あ〝あ〝!?　じゃあ何だ、自分でもわからないもんを付けさせたってか!?　おいおい勘弁してくれよ、これが本当に呪いのベルトだったらどうしてくれんだよ」
　ギャーギャーと、トオルが少女と言い合っていると――突如、背後から激しい悪寒を感じる。
「――伏せろ！」
「え、キャア!?」
　トオルが少女の頭を押さえ込み体勢を低くする。すると二人の頭上を巨大な何かが回転しながら飛んでいき、少し離れた地面へ激突し巨大な砂煙りをあげる。
　いったい何がと、トオルと少女がその何かに目を向けると――そこにあったのは巨大な石斧だった。
「斧？　ったく誰だよ、んな危ねぇもんぶん投げたやつは」
「あの斧……まさか！」
「――ようやく見つけたぜぇ！」
　突如響き渡る第三者の声。その声に少女はびくりと肩を跳ねさせ、恐る恐るといった風に振り返る。するとそこにはTシャツにジーパンといった格好の若い男が立っていた。
「ガーゴイル!?　あの時、あの魔法使いの爆発でやられたはずでは!?」
「は！　俺があの程度の力でやられるはずがねぇだろ！　それよりも、今度こそ逃がさねぇぞ」
「ん？　なに、お前ら知り合いなの？」
　男の姿を見て驚愕の表情を浮かべる少女。対し男は不敵な笑みを浮かべ少女へ言葉を返す。
　一方、完全に置いてけぼりのトオルは、少女にガーゴイルと呼ばれた男との関係性について問いかける。
「あれはガーゴイル。私を追ってきたファントムの一人です」
「あれがファントム……見た目はただの人間じゃねぇか」
　怪人と聞きどんな異形が来るのかと思っていたが、見た目は普通の

人間で少しばかり拍子抜けするトオル。
「いえ、あれはただの俗世に紛れ込むための仮の姿にすぎません。少しでも油断すると殺されますよ」
そんなトオルへ注意を促す少女。その間にガーゴイルは斧の元まで向かうと、なんとその巨大な斧を片手で軽々と持ち上げたではないか。
「今度は逃げられねぇよう、その手足を叩ッ斬らねぇとなぁ」
ガーゴイルは照準を少女に合わせ、斧を地面に叩きつける。すると斧の先から衝撃波のようなものが放たれ、少女目掛けて地面を抉りながら進む。
咄嗟にトオルが少女を抱きかかえ横に飛んだことで回避に成功。二度も己の邪魔をしたトオルへガーゴイルは鋭い視線を向け、斧を肩に担ぐ。
「さっきから邪魔ばっかしてくれるやがって……ただの人間ごときが楯突いてんじゃねぇよ」
「生憎だけど、俺はまだこいつに聞きたいことが山ほどあるんでな。お前こそ、俺の邪魔をするんじゃねぇよ」
「……ひゃははっ！　いいねぇそういう強気な態度！　潰しがいがあるってもんだぜ！」
直後、ガーゴイルの体に変化が訪れる。人間の柔らかい皮膚はゴツゴツとしたものへと変わり、手足の爪は鋭く、顔は爬虫類を思わせるそれへと変貌する。
トオルはその異形っぷりに目を見開くも、視線をそらすことはせず少女を背に隠す。
「へぇ、随分と王子様をしてるじゃねぇか。それはそいつの正体を知っててやってることか？」
「――っ！　やめて、言わないで！」
正体と、どこか含みのある言い方をするガーゴイル。そんな彼の発言に、大声をあげて制止させようとする少女。
だがそんな少女の叫びなど意味なく、ガーゴイルは少女の正体を明かす。

「そいつはな、俺たちと同じファントムなんだよ！」
　言われてしまったと、少女は顔を俯かせる。対するトオルは俯く少女へ顔を向け、静かに言葉を紡ぐ。
「……今の話は本当か？」
「……はい」
　震える声で答える少女。返事を聞き終えたトオルは、今度はガーゴイルへと視線を向ける。
「一応聞くが、お前は賢者の石を手に入れて何をするつもりだ？」
「ああ、そこまで聞いたのか。ったく、おしゃべりな女だ。まぁいい、冥土の土産に教えてやるよ」
　するとガーゴイルは斧を地面に突き立て、両手を目一杯広げるとあらん限りの声で叫ぶ。
「俺、いや俺たちの目的は一つ！　賢者の石を使って次元世界すべての人間をファントムに変えることだ!!」
「次元世界の人をファントムにだと？」
「不可能だと思うか？　でもな、賢者の石さえあればそんなことぐらい造作もねぇんだよ！」
　そしてガーゴイルは少女へと視線を向け
「それにしてもお前の両親はバカな奴らだったなぁ！　あの時歯向かわずにさっさと賢者の石を渡しておけば良かったものを。
　それをまさかこんな小娘に石を渡して逃がした挙句、俺たちに刃向かってくるなんてよ……つくづく馬鹿な奴らだぜ」
「――ッッッ!!」
　両親を馬鹿にしたガーゴイル言葉に、少女は声にならない叫び声をあげ、殺さんばかりの視線を向ける。だがそんな少女の視線をガーゴイルは心地好さそうに受けながら、今度はトオルへ向けて言葉を発する。
「それで、お前はどうする？　そいつを助けて無駄死にするか、差し出してファントムになるか……道は二つに一つだぜ？」
　二つに一つとは言っても、どちらも待っているのは死のみ。いやガーゴイルの言うことが本当なら、自分だけではなくスバルとティア

ナ、延いては知人の全てが危機にさらされる。
『――私がもしもの時は、スバルとギンガのことを頼むわね』
思い出すのは嘗てした約束の記憶。絶対に守ると、命をかけて守ってみせると誓った約束だ。
トオルは背後にいる少女へ顔を向け、その震える肩に優しく手を置く。
「……トオルだ」
「……はい？」
「トオル、俺の名前だ。己の思いを貫き通す男になれと、両親がつけてくれた名前だ。それで嬢ちゃん、お前の名前は？」
いきなり自己紹介をされてポカンとする少女だったが、震える声でトオルの問いに答える。
「――エルピス。誰かの希望になれと、両親がつけてくれた名です」
「エルピスか……いい名前だ」
トオルは微笑み、エルピスの肩から手を離すと再びガーゴイルへと視線を向ける。
「エルピス、俺には命に代えても守らなくちゃならねぇ約束がある。けど、それを守るための力が今の俺にはない。……もし、本当に俺が魔法使いになれるっていうなら――」
そこで一度言葉を区切り一度めを伏せる。そしてそっと、腰のベルトへ手を伸ばし覚悟を決めその言葉を言う。
「俺と契約しろ！　そしたら約束（それ）を守るついでにお前も守ってやる!!」
「――っ!!　はい！　この身は貴方とともにありましょう、トオル!!」
直後、エルピスの懐が輝いたかと思うと、10個の光の球体がトオルとエルピスを囲むように輪を作り、その内の一つが二人の間にやってくる。
（今ならわかる、この指輪の使い方が――契約の仕方が!!）
エルピスはその指輪を取り、右手の中指にはめる。そしてその手をトオルのベルトの手形へとかざすと
《プレジ・カモーン!!》

妙にテンションの高い声で新たな音声が鳴り響く。その直後、トオルは自身の中に何かが流れ込んでくるのを感じた。それはまるで滝のように自分の中へ入り込み、まるで侵食していくかのように体全体へと渡っていく。
そしてその途中、トオルの頭の中に一つの映像が流れ込んでくる。

――それは一人の少女の記憶。
『逃げろエルピス！　お前だけでも生き延びてくれ！』
――目の前には剣を持ち叫ぶ男性と、自分を抱きしめる女性が。
『ごめんねエルピス。あなたを一人にさせて……でも、それでもあなたには生きて欲しいの』
――涙を流しながら、女性は小さな宝石を少女の胸に押し付ける。すると宝石はすうっと少女の胸の中に消えていった。
『さぁ行きなさい。振り返ってはダメよ、真っ直ぐ走るの』
――最後に、女性は少女の額にキスを落とし
『エルピス、あなたが生まれてきてくれて本当に嬉しかったわ。できることなら、もっと一緒に暮らしたかった……っ！』
『でもそれ以上に、お前には死んで欲しくないんだ。お前は俺達の希望だから』
――そして少女が最後に見た両親の顔は、別れを惜しむ涙ではなく
『『さよなら、愛しい我が子よ!!』』
――まるで絶望の内に咲く小さな希望のように、とても綺麗な晴れ晴れとした笑顔だった

（――っ!?　今のは、エルピスの過去……？）
我に返ったトオル。だが時間は全くと言っていいほど経っていないのか、ガーゴイルは未だに同じ場所に立っていた。
「……ん？　左手に何か……って指輪？」
左手に違和感を覚えたトオルが視線を落とすと、そこにはいつの間

に嵌められていたのか銀縁の指輪が陽の光を浴びてキラリと輝いていた。
「……それが私とトオルの力です。さぁ、変身してください」
「変身……なるほど、だいたいわかった」
頭の中に流れてくるのは、このベルト（ちから）の使い方。
トオルはベルトの横にあるレバーへ手を添え、左下を向いている手形が右下を向くように操作する。
《シャバドゥビタッチヘンシーン！　シャバドゥビタッチヘンシーン！……》
するとそんな陽気な音声が繰り返し流れる。そして次にトオルは左手を右肩まで上げると
「変身!!」
まるで呪文を唱えるように叫び、左手をベルトへかざす。
《ロード・カモーン!!》
その音声鳴り終わると同時に左手を水平に伸ばす。すると何かの紋章が刻まれた、銀の丸い魔法陣が現れ
《イエス！　アドベント!!　マイロード!!!》
魔法陣がトオルの体を通過する。それと時を同じくして、半透明になったエルピスがトオルの体と一体化。
そして魔法陣が通り抜けた後、トオルの姿は先ほどまでの私服ではなくなっていた。
全身を包む黒色のボディースーツ。そして銀色の手首から肘にかけて装備された籠手、膝からつま先まで覆う銀の装甲。それらの手首、足首の近くには銀色の宝玉が埋め込まれている。さらに胸と両肩には銀の胸当と肩当が装備され、背中には風に吹かれて靡く黒色のマントが。頭部はフルフェイスの仮面で覆われ、銀の双眸が一瞬発光する。
魔法使いというよりは銀の騎士と呼ぶべきだろう仮面の戦士へ変身したトオル。ガーゴイルをその銀の双眸で睨みつけたトオルは左手をなぎ払うようにして振るい
『王の御膳です、控えなさい!!』

同時にどこからか、トオルと一体化したエルピスの声が響き渡る。
今ここに、一人の戦士が誕生した。
従者と共に戦う、その戦士の名は

――仮面ライダーロード――

戦闘終了とこれから

銀色の仮面の戦士、仮面ライダーロードへと変身したトオル。彼は自身の手を足を胴体をと、体の隅々を見て大変化を遂げた自分に驚く。

「……これが俺なのか？」

『はい。トオルと私、二人の力です！』

嬉々とした声音でそう答えるエルピス。彼女同様、トオルも仮面の下で笑みを浮かべる。

「（これで俺は、あの人との約束を守れる!!）……いくぞ、エルピス!!」

『ええ、トオル！』

そう言葉を交わしトオル……いやロード駆け出した。対しガーゴイルはというと、石斧を構えロードを迎え撃つ。

「は！　姿が変わったぐれぇで調子に乗ってんじゃねぇぞ!!」

「変わったのは姿だけじゃないってことを、今から教えてやるよ!!」

振り下ろされる石斧を躱しながら、ロードはガーゴイルの腹部にパンチを数発、そして掌底を一発お見舞いする。だがガーゴイルも掌底を受ける直前に、石斧の柄の部分でロードの横っ腹を殴りつける。

互いに数歩後退り、ロードは拳をガーゴイルは石斧を構えて睨み合う。

「はっ、いいじゃねぇか！　もっともっと楽しもうぜ!!」

とても楽しそうな笑い声をあげ、再びガーゴイルはロードへ向けて攻撃を仕掛ける。振り下ろされる斧を先ほど同様素手で捌きながら、ロードは一撃一撃を確実に決めていく。

逆にガーゴイルは自分の攻撃が決まらないことに苛立ち、攻撃が徐々に単調で大ぶりになっていく。

「おらおらおら、避けてばっかじゃ話になんねぇぞ！」

「攻撃をいなすのも戦い方の一つだ。それにな、力任せに振るだけじゃ武器を使ってるって言わねぇんだよ！」

激昂するガーゴイルへそう返すロード。その仮面の下、ロードが見ているのはガーゴイルではなく一人の女性の幻影。

『――ほらほら視野をもっと広げて――ああ違う違う！　受け止めるんじゃなくて受け流す！　戦いってのは正面からぶつかるだけが全てじゃないのよ！』

そして思い出すのは嘗ての記憶。師であり憧れの人であったあの女性（ひと）の姿。

『――近接戦だからって退くところはしっかり退かないとダメ！　でも攻められるところは大胆に、それでいて豪快に！』

あの時教わったことが頭の中で流れる。そして学んだ技術が敵の攻撃をどう避ければいいかを教えてくれる。避け方、受け止め方、捌き方と体に染み付いた技がガーゴイルの攻撃を次々といなしていく。

「めんどくせぇ！　これで終いにしてやんぜ！」

一思いにパワーで潰そうと、ガーゴイルは石斧を今まで以上に振り上げる。だが同時にそれは、ロードに対して隙を作るのと同義でもあった。

（ここだ！）

その隙を逃すはずもなく、ロードはガーゴイルへ詰め寄ると腹部へ強烈な一撃をお見舞いする。そして体をくの字に曲げたガーゴイルの手首へ手刀をしその手から斧を奪い取る。

ロードは奪い取った斧を構えると、未だ怯んでいるガーゴイルへ向けて連続で振り下ろす。

「グッ、ガッ!?　このっ……舐めんじゃねぇ!!」

激昂するガーゴイル。体に力を込めたかと思うと、ガーゴイルの体の色が徐々に灰色になっていく。そんなガーゴイルへロードが石斧を振り下ろすと――ガキィン！……硬いもの同士がぶつかった音が響き、石斧が粉々に砕け散る。

「……硬化か」

「その通り！　この力がある限り、俺を傷つけることなんかできねぇぜ！」

硬化を解き、自慢げな口調で叫ぶガーゴイル。確かに、あの斧を砕くほどの防御力は脅威と言えるだろう。

だがそれでもロードは慌てることなく、新たな指輪へ手をかける。

「やられねぇんだったら好都合。こっちの力の実験台にしてやんよ」
《コネクト・カモーン!!》
ベルトへ指輪をかざし右手を前に突き出す。すると目の前に小さな丸い魔法陣が現れ、ロードは躊躇なく魔法陣へと手を突っこむ。
そして中から取り出したのは一振りの剣。柄と刀身の間にはベルトと同じ白い手形があり、中指の真ん中には小さな穴が空いている。
『ローブレイドバスター』、剣と銃が一体化したロードの専用武器だ。
「さて……行くぜ!」
武器を構え、ロードはガーゴイルめがけて駆け出す。先ほど斧が壊れ武器のないガーゴイルはロードの剣撃を防ぎきることができない。そんなガーゴイルにロードは容赦なく剣を振るいダメージを与えていく。
そしてガーゴイルを吹き飛ばすと
『これを使ってください!!』
エルピスがロードにそう言い、彼の前に新たな指輪が移動する。ロードはそれを手に取り、コネクトと入れ替えベルトに翳す。
《ジェミニ・カモーン!!》
するとロードの隣を身の丈ほどの魔法陣が通過し、その中からもう一人のロードが姿を現わす。
「おお、俺がもう一人!」
「ちゃっちゃと済ませようぜ、俺!」
そして二人のロードはそれぞれローブレイドバスターを構えガーゴイルへと斬りかかる。
「なぁ!? 増えただと!?」
二人に増えたロードにガーゴイルは驚愕の声を上げる。そんなガーゴイルにロード×2は容赦なく剣を振るい追い詰めていく。
雨霰(あめあられ)のように降り注ぐ剣撃に、たまらずガーゴイルは再び硬化しロード達の攻撃をはじき返す。
ガーゴイルが硬化したことで、ロードは一度分身を消し
『次はこれです!』
《バインド・カモーン!!》

ベルトを操作し新たな指輪を発動させる。するとロードの足元に魔法陣が現れ、その中から数本の鎖が出現する。
『その鎖はトオルの意志で自由に操作できますよ』
「よっしゃ、じゃああいつを縛りあげろ！」
ロードがそう指示を送ると、鎖はロードの指示通り硬化したガーゴイルを縛り上げ天高く持ち上げる。そしてブンブンと振り回し、遠心力を加えて地面に思いきり叩きつけた。
激しい地鳴りと共に大量の砂煙が宙を舞う。ロードが目を凝らして砂煙の中を見ると、ガーゴイルが未だに無傷のまま立っていた。
「はっ、その程度の攻撃全然きかねぇよ！」
「成る程なぁ、こりゃ大した硬さだ。さて、どう攻略したもんかねぇ」
ここまでの攻撃でガーゴイルの硬化に傷一つ付けられなかったロードは溜息と共にそう漏らす。
『面での攻撃はほぼ効果なしでしょう。とすれば一点集中、点であの硬化の壁を突き抜けるのみです』
「点での攻撃……なるほどな」
エルピスの助言で何かヒントを掴んだロード。そして彼は武器を構えガーゴイルへ向けて叫ぶ。
「そろそろ終わりにしたいんでな、次で決めさせてもらうぜ？」
「次で決めるだと？　はっ、俺の硬化に傷一つ付けられねぇ奴が生意気言ってんじゃねぇぞ！」
「残念だが、傷つけられるんだなぁそれが！」
ロードはローブレイドバスターの手形の親指を内側へ折り曲げる。すると他の４本の指も内側に折り畳まり拳へと変化する。
《キャモナ・ブレイド・タッチノック！　キャモナ・ブレイド・タッチノック！……》
するとそんな音声が流れ、ロードは右手のロードウィザードリングを中指の窪み嵌め込む。
それは宛ら拳と拳を合わせているようで。
《ロード！　ブレイドストライク！　ザンザンザン！　ザンザンザン！》

するとローブレイバスターの刀身に銀色の魔力が収束。そしてその収束した魔力を斬撃と共にガーゴイルへ向けて解き放つ。放たれた斬撃はガーゴイル目掛けて一直線に進んでいき、ガーゴイルは硬化をし正面から斬撃を迎え撃つ。
「んな攻撃、軽く弾いてやらぁ!!」
そして斬撃とガーゴイルが衝突し、僅かな拮抗の後ロードの斬撃が弾き飛ばされる。宣言通り、ロードの放った斬撃を受け切るガーゴイル。
「はっ、この程度かよ！　あんまりたいしたことなかったぜ!?」
どうだと、そう言わんばかりに笑い声をあげるガーゴイル。
だがしかし、ロードの攻撃はこれで終わりではなかった。
「まだ俺のターンは終わってないぜ！」
《ジェミニ・カモーン!!》
右手の指輪を付け替え、ロードは再び分身を作る。そして分身のロードはバスターモードへと形状を変えたローブレイドバスターを操作する。
《キャモナ・ブラスト・タッチノック！》
《ロード！　ブラストストライク！　ガンガンガン！》
「一点集中、狙うのは……さっきの斬撃の痕！」
銃口に収束する魔力。ロードは意識を集中させある一点に照準を合わせ――発砲。放たれた数発の銃弾は縦一列に並び、先ほど斬撃が命中した箇所へと向かって進む。
そして銃弾が波状攻撃のようにガーゴイルへ命中すると、ガーゴイルを覆っていた灰色の皮膚が徐々に罅割れていき――ついには粉々に砕け散った。
「なにぃ!?　俺の石化が！」
「どんなに硬い守りでもな、同じ箇所を狙えば破ることも可能だってことだ！」
硬化を破られ転がるようにして倒れこむガーゴイル。そんな彼を見下ろすロードの背後から、もう一人のロードが背後から飛び出しベルトのレバーを操作する。

《ルパッチ・マジック・タッチ・ゴー！　ルパッチ・マジック・タッチ・ゴー！……》
　そしてロードは右手を胸元へと持っていく。その中指には、一際強い輝きを放つ指輪がはめられていた。
『この指輪には他のものよりも強い魔力が込められています。きっと強力な魔法でしょう』
「だとよ。実験に付き合ってくれた礼だ、受け取りな！」
　そしてロードは指輪をベルトへ翳す。
《オーケー！　フルストライク！　ドゥーユーノウ？》
（クイントさん……貴女の技、お借りします!!）
　その音声の後、ロードとガーゴイルとの間に複数の魔法陣が出現する。ロードはその魔法陣めがけて突進し、魔法陣を通過するたびに右拳に銀の魔力が収束していく。
　そして最後の魔法陣を通過し、拳に凄まじい密度の魔力を纏わせたロードは
「ナックル……ダスター!!」
　その技の名を叫びながら拳を振り下ろす。そしてロードの拳はガーゴイルの腹部を捉え
「グァァァァァァ!?」
　その高濃密度の魔力の拳が直撃したガーゴイルは、その衝撃で数メートル以上吹き飛ばされると最後は断末魔をあげて爆散した。
　ガーゴイルが爆散したのを確認したロードは、突き出した拳を引くと立ち登る爆煙へ目を向け右肩を軽く回す。するとガーゴイルが爆散した場所から黄色の魔法陣が浮かび上がると、そのままロードの体の中へと消えていく。
　一瞬なんだと慌てたロードだが、別に体には何の支障もなく首を傾げる。
「……何も変化がない？……まぁいいか。とりあえず戦闘も終わったことだし、帰って考えるとするか」
『はい。お疲れさまでした、トオル』
　ふぅと、疲れたように息を吐くロードへエルピスが労いの言葉をか

ける。すると足元に魔法陣が出現しロードの体を通過、変身が解除されロードからトオルの姿へと戻る。
私服姿へ戻ったトオルは、自身の体を見回しベルトへ触れる。
（……本当に、俺は魔法使いになったんだな）
自分が魔法使いになったことを未だに信じられていないトオル。だが信じるしかない。事実、自分は先ほど魔法使いとして戦ったのだから。
「どうかしましたか、トオル？」
すると一体化していたはずのエルピスが、呆然とするトオルへそう尋ねる。
「エルピス、お前ってこれからどうするんだ？　逃げ出したってことは、住む家とかねぇんだろ？」
「ええまぁそうですが……。でもファントムは食事を必要としないので、どこか雨風を凌げる廃屋でも探そうかと……」
「成る程なぁ……となると、やっぱりこの手段しかないわけか」
エルピスの返事に、トオルは手で顎を摩りながらそう呟く。いったい彼が何を言っているのか意味がわかっていないエルピスは、ちょこんと首を傾けてトオルを見つめる。
そんなエルピスを無視し一人で結論を出したトオルは、エルピスの方へ顔を向けると
「エルピス、お前は俺の家に来い」
「……はい？　それってどういう……」
さらに首を傾げるエルピスへトオルはこの考えに至った理由を伝える。
「どうもこうも、お前は今狙われてんだぞ？　それが一日中一人でいたら格好の的になっちまうだろうが。それにな、お前と俺は一緒にいた方が何かと都合がいいだろ？」
「確かにそれはそうですが……よろしいんですか？」
「まぁな。俺も一人暮らしの身だし、一人や二人増えたところで構いやしねぇよ。ま、その分働いてはもらうけどな」
トオルの話を聞き、エルピスは「確かに」と呟く。

今までは逃げることとベルトの適合者を探し出すことだけを考えていた。だけど後者の方はすでに解決し、今度はファントムと戦う立場になった。そういった意味では、トオルの側にいる方が都合がいいのは確かである。
「わかりました。それではお世話になります、トオル」
「おう。ビシバシこき使うからそのつもりでな」
これでエルピスの今後の問題はひとまず解決。トオルは公園の外に止めてあるバイクにエルピスを乗せると、一路自宅へと向かって進み始める。

「ただいまーっと」
「……お邪魔します」
自宅の玄関を開け中へと入るトオルとエルピス。トオルは一先ずエルピスに風呂へ入るように指示し、その間に彼女に合う服を選ぶ。だが男の一人暮らしだ、女性しかも自分より遥かに背の低い少女に合う服などあるはずもなく。
トオルは適当なTシャツと短パンを取り出し風呂場へ向かう。風呂場の中からはシャワーの音が聞こえ、無事に風呂には入れているようだ。
「着替え、ここに置いとくからな」
『あ、はい。ありがとうございます』
とりあえずやるべきことを終えたトオルはリビングのソファーに腰をかけ、そして今日1日あったことを思い返す。
ファントム、賢者の石、魔法使い……今まで普通の生活を送ってきたトオルにとって、未知の出来事ばかりが起こった1日だった。
「俺はこれから、あんな奴らと戦っていくのか……」
あの時は後先考えずにエルピスと契約し魔法使いになったが、今思い返すと少し早まってしまったのではないかという気持ちがこみ上げてくる。

魔力のない自分が魔法を、しかもファントムと契約してだ。今は何もない感じないが、もしかしたら後々それ相応のリスクが……。
「……はぁ、自分で選んだってのになに女々しい考えしてんだか。悩むことはねぇ、これで正解だったんだ」
そう、これで正解だったんだ。あのままガーゴイルを野放しにすれば、自分の知り合いにまで被害が及んでいたかもしれないのだ。
次元世界中の人間をファントムにする。今考えれば馬鹿げた話ではあるのだが
「賢者の石、かぁ……。まさか本当に実在するなんてな」
それを可能にする力が存在してしまっているのだ。絵空事だと、そう馬鹿にすることもできない。
「ったく、我ながら面倒くさいことに首突っ込んじまったなぁ」
だらーっと、トオルがソファーにだらしなく凭れかかりぼうっと天井を見つめていると、突如インターホンが鳴る音が聞こえてきた。
時計を見ると午後2時。こんな中途半端な時間に誰が、とトオルが玄関の扉を開けると
「ただいまー、トオル兄！」
「グエェッ!?」
そんな声とともに一つの影が突撃してくる。その光景にどこかデジャヴを感じ、派手な音を立てながら地面に倒れこむトオル。
痛む背中を摩りつつ、トオルは上半身を起こすと目の前の少女へ言葉を返す。
「ああ、おかえり――スバル」
「えへへ～、ただいま～」
目の前で満面の笑みを浮かべるスバル。そんな彼女の頭へトオルは手を伸ばし――ガシィッ、と片手で鷲掴みする。そして持てる力全てを使ってアイアンクローを炸裂させる。
「あだだだっ!?　痛いよトオル兄!?」
「あれほど、ってか今朝も言ったよな？　いきなり抱きつくのはやめろって」
「ご、ごめんなさい～！」

涙目になりながら謝るスバル。だがトオル手に込めた力を緩めず、スバルの後ろ……扉の前に立つティアナへ笑顔を向ける。
「よ、ティアナちゃん。試験お疲れ様、どうだった？」
「あはは、それが来週に再試験を受けることになって……」
苦笑いしつつ頬を掻き、トオルの質問に答えるティアナ。
再試験、その言葉にトオルは首を傾げる。昇格試験は半年に一度だけのはず、それがなぜ再試験などといった形でもう一度受けることができたのだろうか。
するとトオルの疑問を、アイアンクローから逃れたスバルが満面の笑みで答える。
「それがねトオル兄、なのはさんに会ったんだよ！」
「……なのはさん？　ああ、高町　なのは一等空尉のことか」
いや正確には何も答えてなどいないが、それでもトオルはスバルが言わんとすることを理解する。とは言っても、わかったのは高町　なのはという人物のことだけだが。
そこで説明役のティアナがスバルの言葉の意味を代弁する。
「あの、試験官に高町一等空尉もいたんです。それで私たちがCランクのままだと逆に危険だからと、再試験の推薦状をくれたんです」
「成る程なぁ。ま、よかったじゃねぇか。Bランク昇格は間違いなしって言ってもらってるようなもんだろ？」
今日昇格できなかったのは残念だが、それでももう昇格はほぼ確定したも同然。トオルがスバルとティアナに労いの言葉をかけていると
「――トオル、今大きな音がしましたが大丈夫ですか!?」
忘れていた人物が一人、ドタドタと風呂場の方から駆けてくる。トオルは声を出し制止しようとしたが、時すでに遅く……目の前にはバスタオル一枚で体を隠したエルピスが立っていた。
なんとも刺激的な格好をしたエルピスにティアナは顔を赤く染め、スバルはわなわなと震える指で彼女を指差すと
「トオル兄……この女の人、誰？」
「……あっちゃー」

顔にてを当てガックリと項垂れるトオル。そんな彼らを見て、見知らぬ少女二人が敵ではないと知ったエルピスは
「……？　このお嬢さん達はトオルのお知り合いですか？」
キョトンと首を傾げトオルにそう尋ねる。そしてその反対側、つまりはスバルはトオルの肩に手を置くと笑顔で告げる。
「私も聞きたいなトオル兄。なんで知らない女の子が、なんでバスタオル一枚で家の中にいるのかを」
口調は変わらないものの、そのトーンは明らかにいつものよりも低い。
本当に今日は疲れる日だと、トオルは溜息を吐き
「……どっちも説明すっから、ひとまずスバル達は中に入れ。んでエルピスは服着てこい」
そう言って、ひとまずこの場の収拾を図るのだった。

説明と買い物

リビングにて話をすることになったトオル達四人。トオルとエルピスの対面に座るようにスバルとティアナが腰をかける。

ニコニコとスバルは笑顔を浮かべ、その隣に座るティアナは極力隣を見ないように心がけている。トオルもまた、目の前のスバルから送られる圧力に視線を逸らす。

『トオル、何故彼女から目を逸らすのですか？　話し合うのですから、ちゃんと目を見て話さないとダメですよ』

突如、トオルの脳内にエルピスの声が響く。いきなりのことにトオルは驚き隣に座るエルピスへ視線を向ける。

エルピスはそんなトオルの反応が面白かったのか、にこりと笑顔を向け再び言葉を送ってくる。

『契約の恩恵でしょうか、何も言わなくてもトオルと意思疎通ができるようになりました』

『意思疎通……念話みたいなもんか』

念話。それは魔導師達が使う、言葉を介さず脳内でやり取りができる魔法のことである。かつてスバルやその姉のギンガがやっているのを見たことがあるが、まさか自分がそれを経験することになろうとは。

「ふ～ん、二人とも見つめ合って仲がいいんだね～」

その声にトオルの思考が現実に引き戻される。見ればスバルの威圧感がより一層増していた。

スバルからしてみれば、互いに見つめ合った上にエルピスが微笑んでいるのだ。スバルはその仲睦まじ気な様を見せられ、額に小さな青筋を立てる。

『やべー、スバルの奴結構怒ってるぞ』

『え、怒ってるんですか？　てっきりニコニコしてるから機嫌が良いのかとばかり』

『馬鹿野郎、あの漂う威圧感がわかんねーのか？　あれは絶対に怒っ

てるって』
　どこか鈍感なところがあるのか、エルピスはスバルの醸し出す威圧感を全く感知できていない。
　トオルとしては、これ以上スバルの機嫌を損ねるわけにもいかない。とりあえず、紹介だけは済ませておこうとトオルは口を開く。
「まぁ、とりあえず自己紹介だけはしておこうか。こいつはエルピス、訳あって俺の家に居候することになったんだ」
「どうも、エルピスと言います。以後お見知り置きを」
「ティアナ・ランスターです。よろしくお願いします」
「……スバル・ナカジマです」
　居候と、その怪しげな単語にスバルの眉がピクリと跳ねる。
「トオル兄。居候ってどういうことなの？」
　そしてスバルは早速、その居候の件についてトオルへ質問する。だがトオルもその質問が来ることはわかっていたので、焦ることなくエルピスへ念話（仮）を送る。
『いいかエルピス、何かあったら俺が言うことに合わせるんだぞ？』
『合わせるですか？　まぁトオルがそう言うならやってみましょう』
　エルピスの同意も得たことで、トオルは返答のために口を開く。
「実はエルピスは自分がどこから来たのかっていう記憶がなくてな」
「記憶がないって、記憶喪失ってこと？」
「まぁ端的に言えばな。それでお前を送った帰りに、行くあても帰るあてもないこいつを見つけてな。そのまま放置って訳にもいかねぇから家まで連れてきたんだよ」
　実際にエルピスとは帰り道にあったし、彼女には帰る場所も行くあてもない。ただ記憶喪失というところを除けば、ほぼ全ては真実なのである。
　スバルが唖然とする中、このチャンスを逃さんとばかりにトオルは言葉を続ける。
「なに、ちゃんと管理局には身元を探してもらうように相談はするさ。ただ身元が見つかるまでの間は預かるってだけの話だ……それくらい、別にいいだろ？」

「それはいいけど……その話、本当なの？」
　トオルの言葉信じていないわけではない。だが本当に記憶喪失で身元が分からないなら即刻、管理局にて身元を調べてもらう必要がある。スバルはトオルの隣に座るエルピスへ視線を移しそう問いかける。
「ええ、確かに私は記憶がありません」
　トオルの指示通り、彼の話に合わせるため一つ返事で頷くエルピス。
　ですが、とエルピスは続け
「私は別に不安ではありません。貴女のお兄様はとても優しい人で、そんな人に保護してもらえたのですから」
　そう言い、スバルに柔和な笑みを向ける。
　対するスバルは自慢の兄を褒められ、先ほどとは一変し上機嫌になると
「そうだよね！　トオル兄は優しいもんね！」
　嬉しそうな声音でそう答え、まるで子犬のように可愛らしい笑顔を浮かべる。なんやかんやでスバルのご機嫌が戻ったところで、トオルはごく自然に話題をすり替える。
「ところでスバル、高町一等空尉にはちゃんと礼は言ったのか？」
「うん！　なのはさんも私のこと覚えててくれてたんだ！」
　嬉々として高町一等空尉との出来事を話すスバル。その一挙一動に嬉しさが滲み出ており、そんなスバルを見てトオルはふっと口元を綻ばせる。
　かつてスバルは、巨大な火災事件に巻き込まれた。臨海空港一つを全焼させてしまうほどの大火災にだ。そして火災の中スバルを助けてくれたのが先の人物、高町　なのは一等空尉である。彼女のおかげでスバルは命を落とすことはなく、無事に火災現場から生還できた。
（……本当に、あの人にはどれだけ礼を返しても返しきれないな。ギンガを助けてくれたテスタロッサ執務官にも）
　あの時、スバルと彼女の姉のギンガが火災に巻き込まれたと聞いて、あれほどにまで自分の無力を呪ったことはない。

――魔力。たったそれだけ、たった一つそれだけが無いだけ。だがそのたった一つの有無がトオルと魔導師達との埋めようのない差であり、過去のトオルにとっては何物に変えても手にしたかった力だった。
「ははは、そりゃあよかったじゃねぇか。お前の憧れだもんな、高町一等空尉は」
「うん！　それにね、私の魔法も褒められたんだよ！」
まるで花を咲かせるような、そんな笑顔を浮かべるスバル。そんな彼女の笑顔を見て、こうして彼女が笑っていてくれることが一番大切だと、そう思いながらトオルはスバルの話に耳を傾ける。
「それとね、私達新しい部隊へのお誘いが来たんだ!!」
「新しい部隊？」
「機動六課という新しく設立される部隊です」
新部隊へのお誘い。まだまだ魔導師としては若い二人を誘ったその部隊とやらに疑問を抱くトオル。
すると未だテンションの高いスバルが、興奮冷めやまぬ声音で話を続ける。
「それにねトオル兄、その部隊にはなのはさんもいるんだよ！」
「他にもフェイト・テスタロッサ執務官に八神　はやて二等陸佐もです」
「はぁ……そりゃなんつーか、豪華すぎるメンツだな」
先に述べた高町　なのは、フェイト・テスタロッサは管理局を代表すると言ってもいいほどの実力を有した魔導師だ。そして八神　はやてもまた、前述の二人に勝るとも劣らないトップレベルの魔導師である。
そんな有名どころの魔導師が集まる部隊に、まさかスバルとティアナが勧誘されるとは、とトオルは驚き半分関心半分な声でそう漏らす。
「ま、そんな部隊だったら嫌でもいい経験ができそうだな。揉まれるだけ揉まれてこいよ」
「うん、頑張るね！」

「ティアナちゃんも、スバルのことよろしく頼むな」
「はい、任せてください」
スバルとティアナ、トオルは二人にそう告げる。
そのまま話は終わり、スバルとティアナはトオルの家を後にする。
そしてスバル達が去り、再びエルピスと二人きりになるトオル。
「ふふっ、いい妹さんでしたね」
「まぁな、自慢の妹だ」
喜怒哀楽と表情がころころ変化するスバル。そんな彼女をエルピスは褒め、トオルは当然だとでも言わんばかりの声音で答える。
「にしても、今日は一段と疲れたな。さっさと風呂に入って飯食って寝るとすっか」
「そうですね。早めに休息をとったほうが体にもいいでしょうし」
初めての魔法を使った戦闘をしたせいか、体に思った以上の負担がかかっているらしい。トオルはちゃちゃっと風呂に入り、夕食を済ませるとすぐにベッドに横になる。そしてそのまま数分と経たないうちに寝息を立て、夢の中へと落ちていった。
ちなみに、エルピスにはトオルの隣の部屋を貸し与えている。

「さて、買い物だ」
「……はい？」
翌日、朝食を終えたトオルはエルピスへそう告げる。対しいきなりそんなことを言われたエルピスは、首を傾げてトオルに返す。
「だから買い物だ。お前、服とか下着とかの替え持ってねぇだろ？今からそういった日用品を買いに行くんだよ」

「ですが……いいのですか？」
　エルピスは恐る恐るといった風に言う。居候させてもらっている上に日用品まで買ってもらうなどご迷惑では、とそう目で語るエルピスにトオルはチョップを喰らわせる。
「ふみゅっ!?」
　可愛らしい悲鳴をあげ、叩かれた頭部を抑えるとエルピスはトオルを見上げる。そんな彼女にトオルは右手で拳を作り、視線を鋭くさせて言う。
「次そんな顔したら、今度はもっと痛ぇ拳骨（もん）お見舞いすっからな」
「はい……ごめんなさい」
「ったく、次からは気をつけろよ」
　頭をさげるエルピスにトオルは溜息と共にそう告げると、握りしめた拳を開きエルピスの頭にポンと乗せる。
「理由はどうであれ、お前はもうこの家の一員だ。下手な気なんか使ってねぇで気楽にいこうや」
「……はい！」
　一転し笑顔を浮かべるエルピス。彼女の表情が変わったのを見たトオルはよし、と頷き出かける準備を整える。

　場所は変わりミッドチルダの首都クラナガン。
「さて、買い物開始と行きたいが……お前、こういった場所は初めてか？」
「はい、ここまで大きい所は初めてです」
　キョロキョロと、そびえ立つビル群を見上げながら感嘆の声を漏らすエルピス。
（そういやこいつのことを何にも知らねぇんだよな、俺って）
　知っていることといえば、契約の際に見た彼女の両親のことだけ。やはりこれから共に戦う以上、ある程度のことは知っておかなければ、とトオルは考える。そして隣で未だビルを見上げるエルピスを横目に見てふっ、と口元を緩める。

（ま、そう急ぐことでもねぇか）
そう、これから知っていけばいいだけだ。そう結論を出し、トオルは足を進める。トオルが歩き出したことで、エルピスも彼の背中を追うようにして歩き始める。

それから1時間と少し、服や下着など必要なものを粗方買い終えたトオルとエルピスは喫茶店にて休憩を取っていた。
「とりあえずはある程度のもんは揃ったな」
「はい。ありがとうございました、トオル」
コーヒーに口をつけつつ、買い物袋へ目を向けたトオルはそう呟く。エルピスもまたコーヒーを一口飲み買い物袋へ視線を向け、それにしても、と言い
「こんなに買って貰って、お金とか大丈夫なんですか？」
「まぁ基本的に俺は何も買わねぇしな。そのくらい別にどうってことねぇよ」
そう言い再びコーヒーを一口飲むトオル。そしてカップから口を離すとエルピスへ質問する。
「エルピス、ファントムってやつは元は人間だって話だったよな？」
「はい。『ゲート』という強大な魔力を持った人間が絶望した時、その人間の死と引き換えにファントムが生まれます」
「おいおい、魔力を持った人間ってここはミッドチルダだぞ？　魔力のある人間なんざ数え切れねぇほどいる」
エルピスの言葉にトオルが眉を顰（ひそ）めながらそう言うと
「その点については大丈夫です」
トオルを安心させるように落ち着いた口調で言うエルピス。
「この世界の魔導師の魔力を正とすれば、ゲート並びにファントムの持つ魔力は負となります。そしてこの二つの魔力は互いに拒絶しあい、一つの体に同時に存在することはありません」
「……つまり、魔導師はファントムにはならないってことか？」
「端的に言えばそうなりますね」

エルピスが言うことが本当ならば、スバルやティアナがファントムになることはほぼないだろう。彼女の説明を聞き、トオルは内心安堵する。
そんなトオルへ、まだ安心はできない、とそう言わんばかりの声音でエルピスは続ける。
「しかし、賢者の石の力があればその不可能を可能にすることもできます」
「……なるほどな、結局は賢者の石を守れってことか」
つまりやることは変わらない。トオルは約束通りエルピスをファントムから守る、それだけの話だ。トオルは椅子に凭れかかり窓の外へ視線を移す。窓の外には多くの人が行き交い賑わいを見せている。
そんな街の景色をぼうっと眺めていると、トオルはその人集(ひとだか)りの中から不自然な人物の姿を捉える。
その人物は黒のシャツにジーパンといたって普通の格好をした青年だったが
(あいつ、俺を見て笑った?)
そう、その青年はトオルと目が合うとニヤリと口元に笑みを浮かべたのだ。
何故自分を見て笑顔を浮かべるのか、トオルが思い浮かぶ理由は一つ。
「……もう新手が来たってか。随分と早い対応だな」
「トオル、窓の外に何が? それに新手とはいったい」
一人ぶつぶつと呟くトオルにエルピスは不思議そうな目を向ける。トオルは席から立ち上がると荷物を持ち
「エルピス、どうやら買い物の時間は終わりのようだ」
「まさか、ファントムですか?」
目を見開きトオルに尋ねるエルピス。彼女の問いにトオルは一度だけ頷き肯定の意を示すと、代金を払い喫茶店を後にする。
外に出たトオルは先ほどの場所へ目を向けるが、そこには先ほどの青年の姿は無く
「……人が多いな。ここで戦うのはちょっとマズイか」

「場所を変えますか？」
　エルピスの言葉にもう一度頷き、トオルは場所を変えるために人気のない場所へと移動する。

「よし、この辺りでいいか」
　トオル達がやってきたのはクラナガンの外れにある廃工場。トオルは周りに誰もいないことを確認し
「どうせ付いてきてんだろ、出てこい！」
「――あはは、やっぱりばれてたか～」
　大声でそう言うと、廃工場の陰から先ほどの青年が姿を現す。青年は先ほどと同じく笑顔を浮かべており、その笑顔にどこか嫌なものを感じ取るトオル。
「お前、ファントムだろ？」
「まぁね。そう言う君は魔法使い、であってるよね？」
「まぁな」
　青年と言葉を交わしつつ、トオルはその仕草一つ一つに最大限の警戒をする。そんな中、青年はトオルの隣にいるエルピスへ視線を向けると
「ガーゴイルがやられたって聞いて驚いたけど……ふぅん、そう言うことか～」
「つべこべ言ってねぇで、闘(や)るってんならさっさとかかってこいや」
「あははっ、随分急ぐじゃないか」
　一笑の後、青年の姿が一瞬ぼやけたかと思うとその姿が変貌する。
　全身は茶色く、腕や足や胸部は鱗のようなものが覆い、爬虫類のような頭部からは鋭利な角が２本伸びている。そして背中には一対の翼と細い尻尾がゆらゆらと揺れる。
「僕はファントム『ワイバーン』。さぁ、戦いを始めようか魔法使い」
　ワイバーン。そう名乗ったファントムは鋭い爪が光る右手を上げるとクイクイ、と挑発するように曲げる。
　トオルは右手に嵌めた指輪を懐へと持っていく。そこには以前のような機械的なベルトではなく、中央に小さな右手の手形のついたベ

ルトがあり
《ドライバーオン・カモーン!!》
指輪をかざした直後その音声とともにベルトが変化、以前の機械的なベルトがその姿を現わした。
トオルはベルトの手形『マーノオーサー』を操作し左手側へと傾ける。
《シャバドゥビタッチヘンシーン！　シャバドゥビタッチヘンシーン！……》
「……いくぞ、エルピス」
「はい、トオル！」
エルピスの返事を聞き、トオルは左手の指輪をベルトへ翳す。
「変身!!」
《ロード・カモーン！　イエス！　アドベント!!　マイロード!!!》
銀の魔法陣が通過し、エルピスがトオルと一体化する。そしてトオルはロードへと変身した。
『王の御膳です、控えなさい!!』
《コネクト・カモーン!》
エルピスが叫び、ロードはコネクトウィザードリングを使用しローブレイドバスターを取り出し構える。
ロードの戦闘準備が整ったのを確認したワイバーンは
「さて、それじゃあ始めようか!」
嬉々とした声音でそう告げ、ロードめがけて駆け出した。ロードもまた武器を構え、ワイバーンを迎え撃つ。
ワイバーンは鋭利な爪を利用した切り裂き、突きでロードを攻める。ロードは武器を巧みに使いワイバーンの攻撃を受け流し、ブレイドモードの両刃でワイバーンの体を斬りつける。
「痛ててっ！　くっそー、お返しだ!」
一歩後退したワイバーンは、口から数発の火炎球を放つ。だがロードはそれらを斬り裂きながら前へ進み、再び数度ワイバーンを斬りつける。
その一撃でワイバーンは吹き飛ばされ地面を転がり、斬られた箇所

から煙が上る。ワイバーンは傷を押さえながら立ち上がると、変わらず楽しそうな声音でロードへ言う。
「いやーやっぱり強いね～。ガーゴイルを倒しただけあるよ」
「よく言うぜ。まるっきりやる気なんてないくせしてよ」
ワイバーンに対し、どこか不機嫌そうな口調で言うロード。
この短いやり取りの中で、ワイバーンはこれぽっちも本気を出していない。まるでこちらの様子を見ているような、そんな感じで戦っているようロードには思えた。
「まぁ僕のやるべきことは他にもあるからね。ここで殺られるわけにはいかないのさ」
「なにしようとしてるかは知らねぇが、お前はここで俺が倒す！」
《キャモナ・ブラスト・タッチノック！》
ロードはブラストモードに変形させマーノオーサーを操作し、左手の指輪を窪みへとはめる。
《ロード！　ブラストストライク！　ガンガンガン！》
ブラストストライクを発動させ、ワイバーン目掛けて放つ。放たれた弾丸はワイバーン目掛けて飛んでいき、巨大な爆発を起こしもくもくと煙が立ち上る。
ロードは目を凝らして煙の向こうを見るとそこにはワイバーンの姿はなく、小規模のクレーターのみだけが映った。
『やりましたか？』
「……いや、逃がしちまった」
エルピスにそう返しロードは変身を解除する。元の姿に戻ったトオルはクレーターを眺め、先ほどワイバーンが言った言葉を思い返す。
「……他にやるべきこと。あいつ、いったい何をしようってんだ？」
ファントムの狙いは賢者の石だけではない。それがいったいなんなのか
（この一件、ただエルピスを守ればいいってそんな単純なもんじゃねぇらしいな）
腕組みしながらそう考えるトオル。

だがいくら考えても答えは出るはずなく、トオルは考えるのを止めると荷物を置いた場所へと歩き、荷物を持つとエルピスへ声をかける。

「帰るぞエルピス」

「あ、はい」

そして二人は廃工場を後にし、家へ向けて足を進めた。

狙われた少女達

クラナガンの外れにある森。その中を黒シャツの青年、ワイバーンが意気揚々と歩いていた。
そして森の最深部に当たる場所へ赴くと周りをキョロキョロと見回し
「おーいルルハリルー、出ておいでー」
そう誰かを呼ぶように叫ぶ。
するとワイバーンの目の前の空間が歪(いびつ)に歪んだかと思うと、まるでケーキを切るかのように二つに綺麗に裂け、その中から一匹の人狼を模した怪人が現れた。
「やぁやぁごめんね～。ちょーっとボスに用があってさ、連れて行ってくれるかな？」
ワイバーンはルルハリルと呼んだ人狼にそう言うと、人狼は無言のまま一度首を縦に振り背を向けて歪んだ空間の中へ歩き出す。
ワイバーンもその後に続き空間の中に入っていくと、歪みが消え森は元どおりの姿に戻る。
空間の中をワイバーンと人狼が進んで行くと、目の前に一人のローブ服を着た男が現れる。
「おーいボスー」
「ん？　なんだ、ワイバーンか。いったいどうしたんだ？」
男はワイバーンの存在に気付き、ローブの裾を靡かせながら話しかける。
「それよりも、あの女の居場所は掴んだのか？」
「それがさー、やっぱりあの子には味方がついてるよ。ちょっと戦ってみたけど、ガーゴイルを倒すだけの力はあったね」
男の問いにワイバーンは頭の後ろで腕を組みながら答える。ワイバーンの言葉に男は「そうか」とだけ答え、ワイバーンに背を向けると
「連れて帰るのが無理ならば、せめてもう一つの命令くらいはこなしてこい、いいな？」

「あーはいはい、了解了解〜。まっかせといてよ」
ワイバーンはひらひらと手を振り軽い口調で答えると、ルルハリルとともに再び空間の裂け目へと消えていった。
そしてワイバーンがいなくなった後、一人になった男は
「はははは っ、そうか頼もしい味方がついたか。まぁそうでなくてはわざわざ逃した意味がない。彼女にはまだまだ逃げ延びてもらわないとな――私の理想のために」
そう呟き、くつくつと楽しそうに笑う。
そのローブの下から覗く双眸が捉えているのは、果たしていったい何なのか。それはまだ、彼以外は知らないことである。

一方、ワイバーンとの戦いを終えマンションへ戻っているトオル達。
マンションの階段を登りながら、トオルはエルピスに聞こえるような声で呟く。
「にしても、あそこであのファントムを逃がしちまったのは失敗だったな」
買い物袋を片手に、逃してしまったワイバーンのことを思い小さい溜息を吐くトオル。ただでさえ厄介な相手なのだ、できることならばあの場で仕留めておきたかった、そう思いトオルはまた一つ溜息を吐く。
あのファントムがエルピスを捕まえることの他に何か別の目的を持っていることは確か。しかしそれが何なのかがトオルには分からない以上、後手に回ってしまうのは確実。
「くそ、せめてあのファントムの居場所だけでも掴めたら……」

「仕方ありませんよ、トオル。過ぎてしまったことですし、引きずってもしょうがないですよ」
　対しエルピスはそんなトオルを励ますように言うが、それでも逃してしまったという現実は変わらない。
「しょうがないって言ってもな、あのファントムが何を目的として動いているのかわからねぇんだぞ？　このままじゃ奴の後手に回るのは明確だろうが」
　せめてワイバーンの足取りを掴めるだけでも、そう考えながらトオルが階段を登りきり玄関の扉に手をかけた時
「あ、トオル少し待ってください。ドアノブに何かがかかってます」
「……ん？」
　何かに気づいたエルピスがそう言い、トオルがドアノブに視線を下ろすとそこには一つの古ぼけた巾着袋が下がっていた。
　いったい誰が、とトオルが巾着袋をドアノブから取り中身を見る。するとそこには黒と白のウィザードリングが一つずつ入っていた。
「こいつは……いったい誰が？」
　トオルはそれらを手に取り観察し、やはりどこからどう見ても自分が持っている指輪と同系統のものだと推測する。
　この効果が何なのかわからないため、家の中で試そうとトオルは急ぎ足で自宅へ入る。そして玄関に入り、まずは黒い指輪から試そうとそれを右手に嵌めベルトに翳（かざ）す。
《フェンリル・カモーン！》
　するとそんな音声とともにトオルの前に小さな魔法陣が現れ、その中から黒一色で統一されたプラモデルのランナーのようなものが出てくる。そしてでてきたそれは独りでに動き出しパーツが合体、黒い狼のようなプラモデルへと変形する。
「これは狼でしょうか？」
「まぁ見た目からしてそうだろ……にしても、こいつ全然動かねぇな」
　エルピスの呟きにそう返しつつ、トオルは完成したはいいものの全くと言っていいほど動かない目の前の狼に疑惑の視線を向ける。
　すると狼の背中に当たる部分に小さな円形の溝があるのを発見し

たトオル。その形や大きさが右手の指輪が入るくらいのものだと直感で判断し、トオルは指輪を右手から取り外しその溝へと嵌め込む。すると……

『――ワォオオン‼?』

「あ、動きましたよトオル！」

その考えはどうやら当たりだったらしく、狼のプラモデルは目に赤い光を宿し高らかに雄叫びを上げた。

そしてトオルの肩に乗るや否や、彼の頬に顔を擦り寄せてくる狼。どうやらトオルにかなり懐いているようだ。

「どうやら、その狼は魔力で動く使い魔のようなものらしいですね」

「なるほど使い魔か、そいつはラッキーだな」

不幸中の幸いとはこういうことではないだろうか。ワイバーンを逃してしまい足取りが掴めないない今、使い魔のような探索に向いている魔法が手に入るのは非常に心強い。

早速、トオルは狼に向けて一つの指示を送る。

「お前は今からファントムを探してきてくれ。もし見つけたなら、何かしらの方法で俺にその場所を伝えること、いいな？」

『ガウ！』

トオルの指示に狼――ブラックフェンリルは力強く吠えるとそのままどこかへと走り去っていった。

「さて、もう一つは何かな？」

ブラックフェンリルが出て行った後、トオルはもう一つの白い指輪に手をかけ右手の中指に嵌めベルトに翳す。

《グリフォン・カモーン！》

すると今度は白いプラモデルのランナーが現れ、先ほど同様独りでに組み合わさっていく。そして完成し出来上がったのは一羽に赤い鳥。トオルは白い鳥の胸の部分にある窪みへ指輪を嵌めると

『――キィイイイ‼?』

白い鳥の双眸が赤く光り甲高い声で叫ぶ。そしてその鳥――ホワイトグリフォンはくるくるとトオルの周りを旋回しながら飛行する。

どうやらもう一つの指輪も使い魔らしく、トオルは先ほど同様ホワ

イトグリフォンへ指示を出す。
「よし、お前もファントムの足取りを追ってくれ。頼んだぞ」
『キィイイイ!』
トオルの指示にホワイトグリフォンも力強く叫ぶと、そのままドアの外へと飛び去っていく。
そんな小さな背中を見送りながら、トオルはある一つの疑問を抱く。
(あの指輪を送った人物、そいつは俺が魔法使いだって知っている……いったい誰なんだ?)
あの二つの指輪をくれた人物、その全貌は全くの謎に包まれている。だがしかし、一つだけ確かなことがある。それはその人物が自分と同じく魔法に関しての何かを知っていることだ。
(俺以外の魔法使いって線が一番濃厚だな)
だとすれば、味方になってくれれば心強いものはない。しかしこうしてコソコソと指輪(みやげ)を置いていくことからして、まだ味方になってはもらえないだろう、とそこまで考えたトオルは一度思考を止める。
「とりあえず、あのファントムのことはあいつらに任せるとして……俺たちは買ったもんの片付けといくか」
「そうですね。では、早速片付けといきましょう」
どちらにせよ、行動を起こすのはまだ先のことだ。そう切り替え、トオルはエルピスとともに買い物袋を彼女の部屋に運び、各々片付けを始めた。

「……はぁ」
どうも、ティアナ・ランスターです。登場早々溜息を吐いてしまっている私ですが、その理由はとある出来事故にです。
先日、私は機動六課という部隊への誘いを受けました。ただしこの部隊は普通の部隊ではなく、管理局でも屈指の魔導師が集まる部隊だったのです。その他のメンバーも将来有望な新人達で固められ、一部隊にしては過ぎた戦力を有しています。
（そんな部隊に、私みたいな凡人が入ってもいいのかな？）
そう、それが私が溜息を吐いていた理由。
私は特別すごい才能を持っているわけでもない、ただの一般魔導師だ。そんな私がこの部隊に本当に入ってもいいのだろうか、そんな考えが頭の中で繰り返される。
（スバルにはああ言ったけど、やっぱり気後れしちゃうわね）
そんなこと考えちゃいけないってわかってるけど、どうしても考えてしまいまた一つ溜息を吐いてしまう。
「ティアー、どうしたの溜息なんか吐いちゃって」
すると隣を歩くスバルが首を傾けながらそう聞いてきた。
「別になんでもないわ。それよりも、さっさと買い物を済ませちゃいましょ」
スバルにそう返し、私は歩く速度を少しだけ上げる。
今日私たちは、クラナガンに部隊でいる細々としたものを買いに来ていた。あっちは交通の便が悪いらしく、必要なものはある程度変え揃えておきたいと思ってのことだ。
そしてぶらぶら買い物すること一時間。少しずつだが、必要なものが揃ってきたところでスバルが何かを見つけたらしく声を上げる。
「あ、ティアーあそこのアイスクリームのお店があるよ！　ちょっと行ってみようよ」
「そうね、そろそろ歩き疲れてきたところだし、ちょっと休憩しましょ」

そうして私たちはアイスを買い、近くの公園のベンチに座り休憩を取る。
それにしても……
「あんたって本当にアイスが好きよね」
「ん～美味しい！」
スバルの持つアイスの量は異常だと思う。普通だったら私みたいな二段くらいだと思うんだけど、スバルはピラミッド状に重ねられたアイスを美味しそうに頬張っている。目測で約１０個くらいかしら。
「スバル、そんなに食べるとお腹壊すわよ？」
「大丈夫大丈夫～！」
私の忠告を軽く流しながら、スバルはアイスのピラミッドをまた一口頬張る。
そのまま私達がアイスを食べながら談笑していると
「そこのお嬢さん方、ちょっといいかな？」
不意に、黒いＴシャツの男が私達に声をかけてきた。男はニコニコと人当たりの良さそうな笑顔を浮かべているが、私にはその笑顔がどこか不気味に感じられた。
隣ではスバルも私と同じ気持ちなのか、警戒しながら男を見上げている。
「あの、なんでしょうか？」
「いやいや、少し君達にお願いがあってね。ちょっと僕と一緒に来てくれないかい？」
やはりナンパの類か。この手の相手は無視してさっさと場を離れるのが得策。
「すいません、私達待ち合わせしている人がいるので。行くわよスバル」
「うん」
そう断り、スバルと共にベンチから立ち上がり公園の出口へ向かって足を進める。だが私達の行く手を阻むように立ち塞がり、その嫌な笑みをより一層深める男。
「ちょっとどきなさいよ」

「残念だけど君たちを逃す訳にはいかないなぁ。せっかく見つけたいい素材なんだから」
「いい素材……？」
男の言葉に何か意味深なものを感じ、一気に警戒の度合いを引き上げる。すると男は懐からなにやら石のようなものを取り出し地面にばら撒く。すると
「ううううう」
「うぉぉおおお」
ばら撒いた石は形を変え、灰色の鬼のような異形へと変化した。鬼達は剣やら槍やらを持っており、じりじりと私達に詰め寄ってくる。
「ティア、なにこの怪物達⁉」
「私が知る訳ないでしょ！　とにかく、さっさとここから逃げるわよ！」
「逃げるって言ったって、もう囲まれちゃってるよ！」
スバルの言う通り私達の周りはすでに鬼達に囲まれ、逃げ場など一つもない。
……となると、やることは一つしかなさそうね。
「……スバル」
「わかってるよティア」
私が視線を送ると、スバルもどうやら私の言わんとすることを理解しているらしく、懐から待機状態のデバイスを取り出す。
「セットアップ!!」
バリアジャケットを纏いデバイスの銃を構える。スバルも同じくバリアジャケットを身につけ、拳を構えて戦闘態勢へと入る。
「いいねぇ。抵抗された方が捕まえがいがあるってもんだよ……行きな、グール共」
男が指示を送るとグールと呼ばれた鬼達が一斉に襲いかかってくる。
「行くわよ！」
「おう！」
そこから私達は迫り来るグール達を相手に戦った。とは言っても、

このグールと呼ばれる鬼はそこまで大した戦闘能力がある訳でもなく、スバルは拳で私は銃弾で応戦するが
「うぉおおお」
「ティア！　こいつら、全然倒れる気配がないんだけど！」
　スバルがいくら殴り飛ばしてもこの鬼達は全くダメージなど負っていないかのように立ち上がり、再び襲いかかってくる。対し私が狙撃した鬼達は数発の銃弾を要したものの、倒れると砂になって消えていった。
　スバルの拳はダメで私の銃弾では倒せる。でもスバルの魔力で強化した腕力は私の銃弾よりも強力だ。つまりこの鬼達を倒すのは力じゃないってこと？
　脳をフル回転させ、私とスバルの違いを探す。
　打撃と銃撃……いや違う。知らず知らずに弱点に当たっていた……いや、これでもないわね。だとすると何が、私のはただの魔力の弾丸だし……魔力の、弾……――っ！
『スバル！　魔力をあいつらに直接ぶつけて！』
『わ、わかった！』
　スバルに念話を送り、この仮説を証明するための指示を出す。もしもこれが正しければ、この鬼達を倒せるはず。
「ナックルダスター!!」
　スバルは拳に魔力を付与させ、鬼達を殴り飛ばしていく。すると先ほどまでと同じく鬼達は吹き飛ばされるが、今度は立ち上がることなくそのまま砂となって崩れ落ちていった。
　先ほどまで全く倒せなかった鬼達を倒せたことに、スバルは目を丸くして私を見てくる。
「これではっきりしたわ。あの鬼達、魔力を付与させた攻撃でしか倒せないみたいね」
「凄いよティア！　よくそんなことわかったね！」
　笑顔を浮かべ私を賞賛してくるスバルだが、まだ戦いは終わってはいない。すぐに残りの鬼達がスバルと私へ襲いかかってきた。
「よし、倒し方はわかったしもう大丈夫！」

そう言うと、スバルは魔力を付与させた拳で次々と鬼達を薙ぎ倒していく。その結果みるみる内に鬼達は数を減らし
「てりゃあ！」
最後の一体をスバルが殴り倒し、残るは黒Tシャツの男一人だけとなった。
「残るはあなただけ、抵抗せずに大人しく投降しなさい」
デバイスを向け男にそう忠告する。だがしかし男は顔色一つ変えることなく、むしろより一層楽しそうな笑みを浮かべ
「いいよいいよ、想像以上だよ君たち！　これは何としてでも連れて帰りたいね」
嬉々とした声でそう言ってきた。この状況でこの余裕な態度……なにか奥の手が残っている？
『ティア、この人何か変だよ』
『何か奥の手があるのかも。油断しないでよスバル』
スバルも男の態度に何か感じるものがあったのか念話でそう聞いてきた。取り敢えず周りも警戒しながら男の出方を待つようにと指示は送ったものの、何か嫌な予感がしてならないわね。
「さてさて、前座をクリアしたお嬢さん方に特別サービスだよ」
そう言うと男の姿が歪み始めた。そして歪みは次第に形を変化させていき
「な、によ……あれ」
「トカゲ……？」
歪みが収まり姿を現した男に私たちは驚愕させられた。なぜなら男の姿は先ほどまでの人の姿ではなく、トカゲはたまたドラゴンを連想させるような異形へと姿を変貌させたからだ。
なに、この化け物……あの男がなったっていうの……？
「さて、今度は僕が相手をしてあげるよ。あ、死なないように頑張ってね？」
異形から聞こえてきた声や口調は先ほどの男のもの。やはり、あの男がこの異形に変化した……信じられないけど、現実でそんな出来事が起きている。

どうやらこの一件は、私が思っていた以上に厄介なものだったのかもしれない。

通りすがりの魔法使い

グール達を倒したスバルとティアナ。そんな二人に今度はファントム化したワイバーンが立ち塞がる。
明らかにグール達よりも強力な威圧感を発するワイバーンに、ティアナはデバイスの銃口を向けたままどう動くか考える。
「さーて、まずはこっちから行かせてもらうよ！」
「――っ！　スバル回避！」
ワイバーンの口元に炎が収束していくのを視認したティアナは咄嗟にそう叫び、彼女の声に従ってスバルはその場から後退する。その直後、ワイバーンの口から燃え盛る火炎弾が放たれ、先ほどまでスバルが立っていた場所に着弾。轟音とともに巨大な爆破地を起こす。
スバルへ攻撃した隙をつきティアナが数発発砲するが
「よっこらせっと」
まるで椅子から立ち上がるかの様な暢気な声と共にワイバーンは尻尾を横薙ぎに振るい、ティアナの放った魔力の弾を全て破壊する。
そしてワイバーンはそのままティアナへ向かって駆け出す。その速度は常人の比ではなく、すぐにティアナとの距離は縮まっていき
「そぉれっ！」
そんな掛け声とともに鋭利な爪をティアナへと振り下ろす。だがティアナはすんでのところで回避に成功、そのまま後方へ退避する。
「でやぁあああ！」
すると今度はワイバーンの横からスバルが接近し、右手を後ろへ引く。すると右手の籠手――リボルバーナックルから薬莢が一つ排出され、手首についている歯車状のパーツ――ナックルスピナーが高速で回転する。
「リボルバーシュート!!」
スバルの叫びと共に突き出された右腕からは、ナックルスピナーの回転により起こった魔力を帯びた衝撃波が放たれワイバーンへと襲いかかる。だがワイバーンは避ける素振りすら見せず、むしろスバル

の攻撃を受け止めようと右手を突き出す。
　そしてワイバーンと衝撃波が衝突、数秒の拮抗の後に徐々にワイバーンは後方へ押されていき
『ティア、今の内に!!』
『分かってる!』
　ワイバーンがリボルバーシュートを受け止めている隙にスバルはティアナに念話を送る。スバルの意図していることをティアナはやや怒鳴り気味に返し、自身の足元にオレンジ色の丸い魔法陣を展開。するとティアナの周りに7つのオレンジの球体――魔力スフィアが生成され彼女の周りを漂う様に浮遊する。
　ティアナは全神経を集中させ、漂うそれらの照準をワイバーンへ合わせると
「クロスファイア……シュートッ!!」
　右手を薙ぐ様に払い、スフィアをワイバーン目掛けて一斉放射する。放たれたスフィア達はそれぞれが不規則な軌道を描きながらワイバーンへ向かって進んでいき
　――ドドドドォン!!
　轟音と共にワイバーンの姿が爆煙の中に消える。
「はぁ、はぁ……少しは効いたかしら」
　肩で息をしながら立ち上る煙に視線を向けるティアナ。そんな彼女の元へスバルが笑顔で駆け寄ってくる。
「やったねティア!」
「まだ終わったわけじゃないのにはしゃがない。気を抜いてる暇なんかこれっぽちもないわ」
　冷静な面持ちでスバルをそう注意するティアナだったが、彼女も先ほどの攻撃には確かな手応えがあったのか内心では拳を握っていた。
　――だがティアナの言う通り、気を抜いている暇などこれぽっちもなかったのだ。
　スバルを注意するティアナの視線の先、漂う煙の中で赤い影がまるで生き物の様にゆらゆらと動いていた。あれがいったい何なのか、頭で理解するよりも早くティアナの体が動く。

スバルの肩を片手で掴み自分の後ろへ強引に押し退けた直後、煙の中から現れる一発の火炎弾が二人へ襲いかかる。すぐにティアナは自身の前にオレンジの障壁――プロテクションを展開し火炎弾を受け止めるが
「キャァァァ!!」
「ティア!」
プロテクションに火炎弾が触れた直後、火炎弾が爆発しプロテクションを破壊。その衝撃と熱気を浴びたティアナは吹き飛ばされ、スバルへ覆い被さる様に倒れこむ。
ティアナのバリアジャケットは所々が焼き焦げボロボロで、そこから覗く素肌には軽い火傷の痕が見える。
「しっかりして、ティア!」
「うっさい、聞こえてるから……でかい声で叫ばないで……」
意識はしっかりとしているらしく、途切れ途切れになりながらもスバルに言葉を返すティアナ。そこまで酷い怪我ではなかったことにスバルがホッとしたのも束の間
「危ない危ない……危うく殺しちゃうところだったよ」
スバルの耳に届いたのはそんな男の声。スバルは声の聞こえた方へ目を向けると、そこにはほぼ無傷の姿で立っているワイバーンの姿が。
「それにしても、さっきのはちょっとばかり効いたよ。いやはや、女の子だからって甘く見すぎてたね」
変わらぬ口調でスバル達に言うワイバーン。スバルは怪我をしたティアナを庇うように胸に抱きかかえ、ワイバーンを睨みつける。
そんなスバルを見ながら、ワイバーンはぐるぐると右手を回すと
「さて、これでゲームオーバーだね。傷を負った仲間を庇ってじゃあ君も上手くは戦えないだろう?」
ワイバーンの言葉にスバルはティアナを抱く力を強め、抱いてない方の拳を握りしめ構えを取る。ワイバーンはふっ、と嘲笑すると
「ま、気絶程度で済ませてあげるから……二人仲良く眠りな」
そう言いワイバーンは口元に炎を収束させ、スバル達へ火炎弾を放

とうとしたその時
『――ワォォオオン!!』
『――キィイイイ!!』
どこからかそんな獣の叫び声が聞こえたかと思うと、白と黒の小さな影がワイバーンを襲う。
「なっ!? なんだこいつら!」
突然の襲撃にワイバーンは怯み、攻撃を中断しその二つの小さな襲撃者を払い退ける。
ワイバーンから離れスバルとティアナの前に移動したのは、トオルの使い魔のブラックフェンリルとホワイトガルーダだった。
「なに、この小さいの?」
「いや、私にも何が何だか……」
スバルから体を離し上半身だけを起こすティアナ。彼女の質問にスバルは目を丸くし首を傾げて答える。
いったい目の前のロボットのような動物はなんなのか、二人はブラックフェンリルとホワイトガルーダに不思議そうな視線を送る。
『ガウガウッ!!』
『キィィィイ!!』
するとその二体は一つ雄叫びを上げると再びワイバーン目掛けて襲いかかる。ブラックフェンリルはその機動力を生かし地面からワイバーンを襲い、ホワイトグリフォンはワイバーンの周りを旋回し翻弄しつつ攻撃を加えていく。
対しワイバーンは二体の小ささと動きの素早さからなかなか攻撃を当てることができずにいた。
「くっ……この! ちょこまかちょこまかと!」
ダメージは軽量だが継続的に続く攻撃に対して苛立ちを募らせていくワイバーン。二体のプラモンスターを引き裂かんと爪を振るうも、それは徐々に大振りにそして単調になっていく。
『――ッ! ガウガウッ!!』
『キィィッ!』
すると突如、ブラックフェンリルとホワイトガルーダが攻撃を中断

しワイバーンの元から離れる。急に攻撃を中断したことに疑問を抱きつつ、ウザいと感じていた二体が離れたことにワイバーンが内心安堵していると――突如、プラモンスター達の背後に銀色の魔法陣が展開される。
「ティア、あれって！」
「魔法陣……だけどミッドチルダ式でもベルカ式でもない……？」
現れた魔法陣を指差すスバル。その隣ではティアナが目の前の魔法陣が自分の知るどの魔法陣とも一致せず、疑惑の視線を向ける。
「銀の魔法陣……まさか！」
一方、この魔法陣の主に覚えがあるらしいワイバーンは、どこか焦燥を含ませた声音でそう叫ぶ。
すると魔法陣が一際強い輝きを放ち、スバルとティアナはその眩しさに思わず目を閉じてしまう。そして光が収まり二人がゆっくりと瞼を持ち上げると
「……銀」
視線の先に映った人物を見て、スバルは小さな声でそう漏らす。
風で靡く黒のマントから覗くのは銀の装甲に包まれた四肢。そして威風堂々と佇むその姿にスバルとティアナは視線を釘付けにされ
「昨日ぶりだねぇ。それにしてもお早いお付きじゃないか……魔法使い」
「魔法…使い……？」
皮肉めいた口調になるワイバーン。そんな彼の放った言葉に、スバルはその瞳を見開かせる。明らかに自分の知る魔法使い、いや魔導師とは違うその風貌。それに魔導師の要とも言えるデバイスも持っていない。
するとその魔法使いと呼ばれた人物――ロードはプラモンスターに視線を落とすと
「よくやってくれたお前達。もう戻っていいぞ」
『ガウ！』
『キィィ！』
そう労いの言葉をかける。するとプラモンスター達はロードの左

右の手の平の上に移動し、それぞれ白と黒の魔法陣を潜ると指輪へとその姿を変える。
指輪へ戻ったプラモンスター達を左腰のホルダーに収納し、再びワイバーンへと視線を向ける。
「なるほどねぇ、その二体は君の使い魔だったのか」
ロードが予想よりも早くこの場に駆けつけたことに納得するワイバーン。だがロードはそんなワイバーンを無視し、後ろにいるスバル達へと視線を向ける。
傷つきボロボロになったティアナとその隣に座るスバル。そんな二人を一瞥し、ロードは視線をワイバーンへ戻し
《コネクト・カモーン!》
魔法陣からブレイドモードのローブレイドバスターを取り出し、その切っ先をワイバーンへ向ける。
「今度はもう逃がさねぇぞ……ファントム!!」
ワイバーンへそう告げたロードは剣を構え直し、ワイバーンへと襲いかかった。

――時はスバル達がワイバーンと出会う少し前まで遡る
その頃トオルはと言うと、とある場所へと向かっていた。その場所は小さな工場のような場所で、トオルは鉄製の扉に手をかけ中へ入る。工場の中にはコンピューターや細々とした機械の部品などが入った棚などが置かれている。
そんな薄暗い通路の中をトオルが進んでいくと、その先に作業着を

着た黒髪の男の後ろ姿が見えてきた。
「おやっさんおはよう」
トオルはそんな男に挨拶をすると
「おお、トオルか。久しぶりだな」
男はトオルに顔を向けそう言葉を返してきた。トオルがおやっさんと呼んだ男は仏頂面の口元を僅かに綻ばせると、静かに立ち上がりトオルの元まで歩いてくる。
男の名前はガッド・モノビース。この工場の長であり、二人しかいない作業員の内の一人である。もう一人の作業員とは言わずもがなトオルのことだ。
「おやっさん、珍しく笑ってるけどどうしたんだ？」
ガッドはいつも仏頂面で笑うことは少なく、彼が口元を綻ばせていることにトオルは少しばかり驚きながらそう尋ねる。
「ああ、お前が女を連れたって聞いてよ。ようやく異性に興味を持ったかと思ってな」
「異性って……別にそんなんじゃねぇって言ったろ？　居候だって居候」
トオルはガッドに昨日、エルピスと買い物に行くと言ってもう一日休みを貰ったのだ。
そんなガッドにトオルは苦笑いしながら返すと、奥へと進んでいき作業着へと着替える。
「さてと……おやっさん、今日の仕事はなんだ」
「ああ、今日はこいつの修理をしといてくれ。魔法学校の嬢ちゃんのデバイスだ」
そう言って手渡されたのは剣型のデバイス。所々に刃こぼれや損傷が見られ、確かに修理が必要のようだ。
トオルとガッドが働くこの工場では主にデバイスの修理や改良を請け負っており、ガッドの腕はその筋では知らない人はいないと言ってもいい程の職人である。
その弟子でもあるトオルもまた、彼には劣るが腕は一流に近いモノを持っている。早速、トオルはデバイスの状態の確認、そして修理を

開始した。

それから一時間と少し経過し、トオルが修理を続けていると

「――っ!?」

トオルの視界が一瞬白に染まったかと思うと、目の前の光景とは別の何かが映し出される。

そこには昨日出会ったファントム　ワイバーンと

(スバル、それにティアナちゃん!?)

バリアジャケットを身につけたスバルに全身が傷だらけのティアナ、そんな二人の姿が視界に入った。

「なんで…魔導師の二人がファントムに……」

エルピスの話では魔導師はゲートになることはない。だというのに、なぜ二人はファントムに襲われているのか。

(いや、今はそんなことを考えてる場合じゃない。すぐに二人の元まで行かねぇと)

「ん?　どうしたトオル、んな怖い顔して」

するとトオルの異変に気付いたガッドがそう声をかける。

「……おやっさんすまねぇ……ちょっと行ってくる!」

「あ?　行ってくるってどこに……っておいトオル!」

ガッドの静止も虚しく、トオルはそのまま工場の外へと走り去ってしまった。

そして工場の外に出たトオルはマンションに留守番させているエルピスへ念話を送る。

『エルピス、聞こえるか!?』

『はい、聞こえています。それよりも、そんなに慌ててどうしたんです?』

『スバルとティアナちゃんがファントムに襲われた。今すぐ助けに向かうぞ』

トオルはそう言うや否や、手形のバックルに右手を翳(かざ)す。

《ドライバーオン・カモーン!》

「……変身」

《ロード・カモーン！　イエス！　アドベント!!　マイロード!!!》
トオルはロードへ変身、自宅にいるはずのエルピスも彼と一体になる。
『トオル、先ほど言ったことは本当なんですか？　ワイバーンが魔導師である彼女達を襲っているなど』
「使い魔達から連絡が入った。現に今、あのファントムはスバル達を襲っている」
エルピスにそう返しながら、ロードは右手の指輪を付け替える。
「場所は使い魔達から聞いている……行くぞ」
《テレポート・カモーン！》
その音声とともにロードの足元に魔法陣が出現。そしてロードの体を通過したかと思うと、ロードの姿はこの場所から消え去った。

――そして時間は現在に戻る
《バインド・カモーン！》
ロードは魔法陣から出現させた鎖でワイバーンの体を縛り上げ、ブレイドモードからブラストモードに変形させワイバーンの体を狙い撃つ。
「グッ…ガァァァ！」
大量の銃弾を浴びたワイバーンは鎖から解放され地面に倒れこむ。そんなワイバーンにロードは休む暇なく銃を発砲するが、ワイバーンはすんでのところで回避しお返しに火炎弾を放つ。
ロードは火炎弾を回避し、さらに指輪を付け替えロードブレイドバスターのマーノオーサーに翳す。
《ジェミニ・カモーン！》
すると右手に魔法陣が現れ横にスライドすると、そこからブレイド

モードのローブレイドバスターが現れロードの手中に納まる。そしてロードは剣と銃を使いながらワイバーンをさらに追い詰めていく。
　そんなロードの戦闘を遠巻きに眺めていたスバルとティアナは、ワイバーンを圧倒するロードに目を奪われていた。
「あの銀の男、化け物を赤子のように……」
「それにあんな魔法、今まで見たこともないよ」
　ティアナはそのロードの圧倒ぶりに唖然とし、唇を震わせながらそう呟く。スバルも初めて見るロードの魔法の数々に驚きを隠せていない。
　その頃ロードの猛攻に追い詰められていくワイバーンは、一度ロードから距離を取り息を整える。そんなワイバーンにロードは一つ質問をする。
「お前があの二人を狙った理由はなんだ、教えろ」
「いいよ……と言いたい所だけどね、生憎とそれは話しちゃいけない決まりなんだ」
　ロードの問いにそう返したワイバーンは「次は僕からの質問ね」と言い
「君はなんでその二人を守るんだい？　君にとっては赤の他人のはずだろうに。……それとも、魔法使いになって正義の味方でも志したのかな？」
　追い詰められているのにも拘わらず、その皮肉めいた口調を崩さないワイバーン。そんなワイバーンの言葉にロードは動きを止め
「正義の味方か……はっ！　んなもんには毛ほども興味はねぇよ」
　そう言い、ワイバーンの言葉を一蹴する。そして右手にフルストライクウィザードリングを嵌め、ベルトのマーノオーサーを操作する。
《ルパッチマジックタッチゴー！　ルパッチマジックタッチゴー！》
「俺はただ、守らなきゃならねぇもんを守る……それだけだ」
　そして右手をベルトへ翳し
《オーケー！　フルストライク！　ドゥーユーノウ？》
　自身とワイバーンの間に幾つもの魔法陣が並ぶ。ロードはその場

で一度トントン、と右足の爪先(つまさき)で地面を叩きその場で大きく跳躍。そして降下しながら魔法陣を潜り抜けていき、その度に右足に高密度の魔力が収束していく。
　ワイバーンはロードの攻撃を躱そうとはせず、その場に立ち尽くしたままロードを見上げ
「なるほど、それが君の戦う覚悟か。ならその覚悟でどこまで戦えるのか……地獄で見届けてあげるよ」
　ワイバーンがそう告げた直後、ロードは最後の魔法陣を潜り抜け銀色に輝く右足でワイバーンを蹴り飛ばす。その一撃を浴びたワイバーンは爆散、ロードが地面へ着地するとワイバーンがいた場所から魔法陣が現れロードの体の中に消えていく。
　そして立ち上る煙にロードは視線を向けると
(結局、あいつがなんでスバルとティアナちゃんを狙ったのかは聞けなかったな)
　収穫を得られなかったことに少しばかり気を落としつつ、ロードは右手の指輪を付け替える。すると
「あ、あの!」
　そんなロードにスバルが声をかけ、ロードは彼女へと顔を向ける。ロードと視線が合ったスバルは、一瞬肩を跳ねさせるが、意を決して話を切り出す。
「あなたに聞きたいことがあるんです。あなたは一体誰で、あの怪人とどんな関係があるんですか?」
　スバルの質問にロードはしばしの間沈黙し、どう答えればいいか考える。馬鹿正直に正体を明かすわけにもいかない……となれば
「俺はロード。通りすがっただけの、ただの魔法使いだ」
「ロード……それがあなたの名前なんですね?」
　スバルの問いに今度は無言で頷き肯定の意を示すロード。
　そして話は以上だと言わんばかりに、ロードはベルトに手を翳すと
《テレポート・カモーン!》
　その音声と共にロードは魔法陣の中へと消えていった。
　ロードとワイバーン、この両名がいなくなり残されたスバルとティ

アナはというと
「……とりあえず、ティアは病院に行こっか」
「……そうね」
一先ずティアナの怪我の具合を確かめるため、病院へと向かって足を進めた。

次元と次元の狭間。かつてワイバーンが訪ねたその場所では、ボスと呼ばれたローブの男が椅子に腰掛け、一人静かに本を読んでいた。
すると男は何かに気づき本から目を離すと
「……ワイバーンがやられたか」
そう呟き本を閉じる。そして椅子から立ち上がると本を椅子の上に置きその場で、パチン、と指を鳴らす。すると男の目の前の空間に一つの穴ができ、その中から一つの人影が出てくる。
「あの……お呼びでしょうか……」
虫の羽音のようなか細い声でそう言ったのは、淡い水色の癖っ毛を持った見た目小学生の少女。そんな少女に男は歩み寄ると
「次はお前の番だ。魔法使いを倒し賢者の石を奪ってこい……いいな？」
少女に対してそう指示を送る。そしてそれ以上は何も言わず少女に背を向けると、椅子へと向かって歩き再び腰をかけ読書を再開する。
男の指示に少女はスカートの裾を握りしめると

「わかり…ました……」

またまた蚊が鳴くような小さな声でそう言うと、いつの間にか背後に立っていたルルハリルと共に歪みの向こうへと消えていった。

何でも屋へＧＯ！

深夜。雲一つない夜空には星々が煌めき、その黒いキャンパスのような空を彩る。そんな星々よりも輝き、暗くなった街を照らす月明かり。その明かりの下、人気なのない路地を歩く小さな人影が一つ。

この月夜に映える淡い水色の癖のある髪。服装は胸元に赤いリボンが付けられた白いシャツに赤いスカートを着た幼い少女だ。

少女は路地をとぼとぼと俯き加減に歩いていた。目的地などないかのようにあてもなく歩いている少女の前に複数の大人の影が現れる。

「お嬢ちゃん、こんな夜に一人で歩いてどうしたのかな？」

「迷子なら俺たちが家まで連れて行ってやろうか？　それともこのまま飯にでも行っちゃう？」

ニタニタと笑いながら少女にそう言う男達。対する少女はいきなり現れた男達に驚き、肩をビクつかせて数歩後ずさる。

「あ、あの…私やることがあって…だから……」

震える声でそう言う少女。男達を見上げるその青い双眸は不安気に揺れ、その小さな体も僅かに震えている。

そんな少女の小動物のような反応に男達はさらに笑みを深める。

「んなことよりも、俺たちと一緒に遊ぼうぜ」

「ご、ごめんなさい……」

そう言って少女は男達に背を向けてその場を去ろうとする。だがそんな少女の腕を一人の男が掴み

「は、離して…ください……」

「まぁまぁ、んなこと言わないでちょーっとだけ遊ぼうぜ。それともお兄さんといいことでもするか？」

「ひゃははっ、お前本当にロリコンだな！」

少女は抵抗するも男はその手を離さず、そのまま強引に自分の元に引っ張ろうと力を込める。少女は諦めず前に前に足を進め、目に涙を浮かべながら男達に向けて叫ぶ。

「お願いします…離してください。これ以上は……」

「大丈夫大丈夫、す～ぐに終わるから」
「違います、そう言うことじゃ――っ!!」
　すると突如、少女は声を途切らせ目を見開くと動きを止める。動きを止めたことで少女は男に引っ張られ尻餅をつく。そして男達は少女を囲むように移動し、その中心で胸を押さえる少女を見下ろす。
「はぁっ…はぁっ……!」
「おいおい泣いてるぜこの嬢ちゃん。ちょっと強く引っ張りすぎたんじゃねーの？」
「ちげーよ、お前の顔が怖いんだよ」
　咽(むせ)び泣く少女を見て、そんなことを言い合う男達。するとその中の一人が少女の口が小さく動いていることに気づく。
「……て……さい……」
「ん？　おい、このガキ何か言ってるぞ」
　その男の言葉に、他の連中も話を中断し少女の言葉に耳を傾ける。
「お願い…です……早く逃げて…くだ、さい……っ！」
「あ？　逃げろって、嬢ちゃん何言って――」
「――いいから早く逃げて!!」
　声を大にして叫ぶ少女に男は一瞬後ずさる。だが見た目小学生な女の子にそう言われて引き下がるなど、男の小さなプライドが許すはずもなく
「嬢ちゃん、この状況をわかって言ってんのか？　あんまし舐めた口きいてっと、ちょっとばかり痛い目見てもらうぞ」
　そう言って一人の男が少女の手を掴み持ち上げる。少女はその双眸から涙を流しており、目の前の男に震える声で言う。
「はや、く…逃げて……」
「チッ、このガキまだ言ってやがる」
「もう…だめ……っあああ!!」
　少女は慟哭にも似た叫び声をあげ、一瞬身体中の力が抜けたかのようにぐったりとする。何事か、と男が少女の顔を覗き込んだ瞬間、少女の口元が怪しく弧を描いたと思ったら――男の視界に真紅の何かが映り込む。

「――は？」
真紅のそれが何なのかわからず男が視線をそこに向けると――男の腹部から夥(おびただ)しい量の血が流れていた。
それから数秒、その真紅が何なのかを理解した男は苦痛に顔を歪め腹部を抑える。
「あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝！？」
「お、おい！？　何があったんだ……って、お前その血！」
男の絶叫に周りの連中も騒ぎ出し、男から流れる血を見て驚愕する。
「――くくくっ、はははっ！」
するとそんな男たちの耳にそんな笑い声が届く。その笑い声の方向へ視線を向けると、そこには左手で前髪を掻き上げた少女が佇(たたず)んでいた。彼女の右手は男の血で真紅に染まっており、そんな少女を男達は恐ろしいものを見るような目で見る。
そんな男達へ少女は口の両端を釣り上げ狂気にも似た笑みを浮かべ――

『昨夜未明、ミッドチルダ北部で若者が数人大怪我を負い意識を失って倒れているのを一般市民が発見しました。彼らはいずれも大怪我

は負っていますが命に別状はなく、意識が覚め次第事情を聞くとのことです』
「……なんともまぁ、物騒な世の中なこって。しかもこの辺りって言うのがなぁ」
　ワイバーンとの戦闘から数日。あれから新手のファントムも現れず平和な日常を送っているトオルは、朝食のトーストを齧りつつニュースを見てそう呟いた。
「トオル、この世界ではこんなにも日常的に事件が起こるものなのですか？」
　トオルと共に朝食を食べているエルピスは、毎日のように流れる事件のニュースを見てトオルへそう尋ねる。彼女の問いにトオルは頬杖をつき、彼女を横目で見ながら答える。
「まぁミッドチルダは広いからな。自然に人も多くなるし、そりゃあ厄介ごとも増えるもんだろ」
「けれどこの世界には魔導師がいるのでしょう？　彼らならすぐに事件を解決できると思うのですが」
　エルピスの言葉にトオルは視線をテレビへ向け言葉を続ける。
「管理局……ああ、魔導師達の組織のことな。その管理局は次元世界って言って、この世界以外にも多くの世界を管理してるんだ。
　もちろん、人間程度がそんなでかいもんを管理しきれるはずがねぇ。まぁ簡単に言えば人手不足なんだよ、自分の世界も完璧に管理できないほどにな」
「なんといいますか大変なんですね、この世界の人たちも」
「そうそう、大変なんだよ」
　そう言ってトオルは最後の一口を口に運び咀嚼し飲み込む。そしてカップに入ったコーヒーを飲み干すと「さて」と言い椅子から立ち上がる。
「今日も工場の方へ行くんですか？」
「いや、今日は近くの町に足りない部品を買うだけだ。『大した仕事も入ってねぇし今日はそれだけでいい』っておやっさんから連絡もあったしな」

そしてトオルは食器を片付け出かける準備を整える。そしていざ出掛けようと玄関へ向かうと、そこには私服に着替えたエルピスが待っていた。
どこからどう見ても行く気満々なように見えるが、念のためにトオルは彼女へ確認をする。
「エルピス、お前もついてくるのか？」
「はい。私も荷物持ちくらいはできますし、お役には立てるかと」
「いやいや、女に荷物持ちなんてさせられっかよ。まぁついて来たいってんなら構わねぇが……多分退屈だぞ？」
買い物と入っても工場で使う部品を買いに行くのだ。女性がついて来て楽しいとは到底思えなく、トオルはエルピスに念を押すように言う。しかしエルピスはにこりと花が咲くような微笑みを浮かべ
「どこに行こうと、トオルと一緒なら大丈夫です」
「……そっか」
そんなことを言われてしまえば断るにも断れない。トオルとエルピスはマンションを出ると目的の町へと向かって歩き出す。

トオルが向かったのは、マンションからバスで15分の場所にある小さな町。クラナガンのような高層ビルが立ち並ぶような町とは違い、レンガ造りの家が立ち並ぶ西洋風な町だ。
クラナガンとは違った風景をを見回しながらエルピスはトオルへ行き場所を尋ねる。
「トオル、目的のお店とはいったいどこですか？」
「んーもうちょっとしたら……あったあった、あそこだ」
そう言いトオルが指差した先には、町の風景に溶け込んだ赤レンガ造りの一軒家。そんな一軒家を見てエルピスははて、と首を傾げる。
「トオル、話を聞いたところ部品を買いに来たのですよね？　見たところあの家は普通の民家のように見えるのですが……」
「見た目は、な……本当に、見た目と同じであってくれたらどれほど良かったことか……」
どこか遠くを見つめ、沈んだ声音で言うトオル。そんなトオルの様

子にエルピスは再び首を傾げながら、その一軒家の扉の前へと移動する。
　そして扉の取っ手に手を掛けようとしたその時
「あ゛あ゛!?　金は耳揃えて持って来いって言ったやろ！　喧嘩売っとんのかおどれはぁ!?」
「す、すみまぎゃあああ!?」
　扉の向こうから聞こえてきたヤクザのようにどすの効いた女性の声と男の悲鳴。エルピスは取っ手を握ろうとした手を止め、恐る恐る胸の前まで戻しトオルへ顔を向ける。
　そんな彼女の心の中を理解しているトオルは静かに頷くと、彼女の代わりに扉を開けた。カランカラン、と扉に付けられた鈴が鳴り、エルピスは店の中へと目を向ける。
　中はテーブルと椅子が幾つか並んでおり、奥へと続く扉の前に簡易的なカウンターが設けられていた。そしてカウンターの前では、胸倉を掴まれ怯える男とそんな男へ怒声を浴びせる女性が一人。
「ヤクさんちわ――」
「今は取り込み中や、後にせえ！」
「――すゲバッ!?」
　トオルがこの店の主人へ挨拶をした瞬間、叫び声と共に銀の何かが高速で飛来しトオルの頭へ直撃、トオルは後方へ勢いよく倒れる。
「トオル!?　だ、大丈夫ですか!?」
　エルピスは倒れこんだトオルへ駆け寄る。見ればトオルの額は赤く腫れ上がりたんこぶの様なものができていた。そしてトオルのすぐ側には、先ほどトオルを吹き飛ばしたであろう銀の銃弾の形をしたネックレスが転がっていた。
　エルピスがそのネックレスを手に取ると
《ありがとな、お嬢ちゃん》
「ひゃっ!?」
　そのネックレスがピコピコと点滅したかと思うと、なんとエルピスへお礼を言ったではないか。突然の出来事にエルピスはネックレスを手放してしまうが、ネックレスは重力に逆らうかの様に浮遊しエル

ピスの目の前でふわふわと漂う。
　エルピスがそんな奇怪なネックレスへ視線を向けていると
「そ、そいつはインテリジェントデバイスっつってな、　人工知能がついた魔導師に必要なツールだ」
　そんな彼女へ痛みに顔を歪めたトオルが額を押さえながら起き上がるとそう説明をする。するとネックレスはトオルの前へと移動し
《大丈夫かトオル？》
「あ、ああ……それで、今回は何があったんだデストルーク」
　デストルーク。トオルはネックレスをそう呼び、ことの次第を尋ねる。するとデストルークは機械染みた声にどこか困った様な感情を含ませ、目の前の惨事についての説明へと移る。
《依頼品の代金が足りないそうだ。やれやれ、その程度のことなら少しは待っててやればいいものを……》
「ああ、そういうことか」
「人間　一度言ったことは死んでも守らんかい！　金が足りんのやったら腎臓なりなんなり売ってでも用意せぇや!!」
　室内に響き渡る怒号。まぁ怒りの理由はわからなくはないが、それくらい多少は目を瞑ってやってもいいだろう、トオルは暴力（せっきょう）を受ける男に同情しながら心の中で怒りの主へそう漏らす。
「わ、わかりました！　す、すぐに持ってきますぅ！」
　男は涙目になりながらそう言い、逃げる様にして店の外へと飛び出していった。男がいなくなったことで店内は初めて静けさを取り戻し、女性は「ふぅ」と息を一つ吐くとトオルへ顔を向け
「お？　トオル、いつの間に来とったんや？　それにその額、どっかで頭でも打ったんか？」
　まるで今気づきましたと言わんばかりの声音でトオルへそう尋ねる。エルピスはその時、初めて女性の容姿をその目に映す。
　腰まで届きそうな淡い茶髪の髪は頭の上で一括りにされ、同じく茶色の右目はまるで獲物を襲う虎の様にギラギラとしている。反対の目はその瞼を閉じ、縦一文字の深い傷があった。
　そんな彼女にトオルは痛みとは別に額を手で押さえると、疲れたよ

うな声音で言う。
「ヤクさんがあの男の人を痛めつけている時からな。ったく、店に入ってきた客にデバイスをぶん投げるんじゃねぇよ。しかもあんたの相棒だろ？」
「えーと……ああ、そう言えばなんか投げたなぁ。いやいや、あの男に説教するのに夢中で気付かんかったわ！　はっはっはっ、すまんなぁ！」
　全く悪びれた様子もなく豪快に、それでいて快活に笑う女性。もうその辺の男よりもよっぽど漢らしいその様に、トオルは深い溜息を吐きジト目を向ける。
　すると女性はトオルの後ろに立つエルピスの存在に気付き、少し驚いた様に目を見開かせ
「なんやトオル、女なんか連れ回して……もしかしてこれか？」
　そう言い右手の小指を突き立てる女性。エルピスはその意味がわかっていないのか、首を傾げるとトオルと彼女を交互に見る。
「あんたは親父か。言っとくけど、こいつとはんな関係じゃねぇよ。こいつはただの居候だ、い・そ・う・ろ・う！」
　トオルは女性へそう説明すると、今度はエルピスの方へと振り返り
「この女性（ひと）はサクヤ・シドウ。この店で何でも屋をしている元管理局員だ」
「初めまして、エルピスと申します。トオルの家でお世話になっています」
「うちはサクヤ・シドウや、こっちこそよろしゅうな」
　差し出されたエルピスの手を握り返し握手をするサクヤ。するとエルピスは今までの話の中でふと、疑問に思ったことを口に出す。
「トオル、彼女の名前はサクヤですよね？　なぜトオルは彼女を『ヤクさん』と呼んだのですか？」
「ああそれはな、さっきまでのやり取りを見てたらわかると思うが……この人、ヤクザみたいだろ？　だからついつい『サクヤ』じゃなくて『ヤクザ』って――」
　そこでトオルの言葉は途切れる。いや、サクヤの右拳がトオルのど

突き、その言葉を無理やり止めたのだ。
　再び地面へ倒れ伏すトオルを横目に、サクヤは少しばかり声を大にし
「ったく、んなこといちいち説明せんでええやろ。見てみぃ、この嬢ちゃんも怯えて……ないなぁ」
「ヤクザというものが何かは知りませんが、なんだかカッコイイです！」
　ヤクザと、その響きにどこか惹かれるものがあったらしく、エルピスはキラキラとした眼差しでサクヤを見つめる。
　対しこんな反応が返ってくるとは思ってもみなかったサクヤはというと、その向けられた眼差しに対して照れ臭そうに頬を掻きそっぽを向くと
「なんともまぁ、世間知らずな嬢ちゃんやなぁ。純粋というか真っ白というか……ちょっと苦手やなぁ」
　ぼそぼそと言ったので聞きとれなかったエルピスは不思議そうな視線を向ける。そんなエルピスへ「なんもないなんもない」と言い、ひらひらと右手を振るサクヤはようやく起き上がったトオルへ視線を移し
「どうせ旦那から頼まれて来たんやろ？　せやったらちょい待っといてや」
　そう告げるとサクヤはカウンターの奥の扉へと消えていった。サクヤがいなくなった後、エルピスは小さな声でトオルに耳打ちをする。
「トオル、彼女の左目に傷がありましたが、あれはどうしたんですか？」
「あーあれか、あれはなぁ……」
　どこか言いにくそうな顔をするトオル。するとトオルの前に浮遊していたデストルークが彼の代わりに答える。
《あの傷はな、サクヤの誇りなんだよ》
「誇り、ですか？」
《ああ。だから彼女はあの傷を隠すことなく、堂々と他人に見せて

いるのさ》
　そういうデストルークの声はどこか誇らしげで、そして少しの悲しみも含まれていた。
《まぁ彼女の性格上、隠すということはしないと思っているがね》
　そしてデストルークはトオルの前からエルピスの前へと移動し
《まだ会って間もない君には、サクヤの過去の話をそう簡単に話すわけにはいかない。今日のところはこれで我慢してもらえるかい？》
「ええ、それだけ教えていただければ十分です。ありがとうございます」
　デストルークにお礼を言い、エルピスは満足げに笑顔を浮かべる。
　すると以外と早く目的のものが見つかったらしく、サクヤが小分けにした袋をいくつか持って扉から出てきた。
「ほい、これが頼まれてたもんや」
「お、ありがとなヤクさん」
　それらを受け取ったトオルは、これ以上この店にいる理由もないのでサクヤに別れを告げ店を出る。
「それじゃまたな、ヤクさん」
「どうも、お邪魔しました」
「おう、また来てな！　知り合いのよしみで安くしてやるで！」
《また会おう、トオルにお嬢ちゃん》
　最後ににかっと笑顔を浮かべるサクヤを見て、トオルは店の扉を閉める。
「最初は怖かったですけど、なんだかんだでいい人達でしたね」
「俺はもう少しお淑やかだったらって思ってやまねぇよ。来るたび来るたびあのバカ騒ぎだしな」
　そうボヤきながらも、トオルの口元は緩く綻んでいた。そんなトオルを見てエルピスもまた微笑み、荷物を持つ手に力を込める。
「さて、とりあえず荷物は明日おやっさんに渡すとして、時間もあるし街を見て回るか？」
「いいですね、それじゃあ行きましょう」
　トオルの提案にエルピスは賛同し、二人は他愛ない話をしながらぶ

らぶらと街の観光を始めた。

繋ぐ手

次元の狭間。そこでは現在、二人の男が話し合いをしていた。
一人はボスと呼ばれるローブ姿の男。そしてもう一人はシャツとジーンズを身にまとった厳つい顔をした男。
「俺に何の用だ、ナーガ」
ローブの男の言葉にナーガと呼ばれた男は不満を前面に押し出した顔で口を開く。
「ボスよぉ、なんであんな半端モンに次の役目を任せたりしたんだ？
俺ならあいつよりもうまくやれるぜ」
「それはそうかもな。だが、それでも俺はあいつを選んだ」
「だからなんだって――っ！」

――俺の選択に意を唱えるつもりか？

ローブから覗く瞳がナーガを捉える。瞬間、男の全身から空間をも押しつぶさんばかりのプレッシャーが。
ナーガは無意識に一歩後ずさると、チッ、と一つ舌打ちをし踵を返す。
「わかったから、んな怒んなって」
そう言いながら、ナーガは男の元から去る。しかしその表情は歪み、苛ついたもので。
そしてナーガはどこからか現れたルルハリルによって狭間から姿を消した。男は一人になったことでローブの中から本を取り出し、栞を挟んだページを開く。
「これでまた一つ、未来が動く」

ミッドチルダ中央区画湾岸地区。そこには設立されたばかりの真

新しい建物が。
その建物は先日、スバル達がスカウトされた『古代遺失物管理部機動六課』の隊舎である。
隊舎内のある一室。ミーティングルームのような場所に彼女達の姿はあった。
「みんな、急に集まってもらって悪いなぁ」
制服に身を包んだ少女はモニターの前に立ち、集まった面々へと頭を一つ下げる。
「大丈夫だよ、私たちの仲じゃない。ね、フェイトちゃん？」
「うん。だからはやて、頭を上げて」
栗色の髪をサイドテールにした女性、高町なのはと隣の金髪の女性フェイト・テスタロッサ・ハラオウンは笑顔で答える。
そんな友人二人の言葉にはやては頭を上げ笑顔を向ける。
「ありがとうな。シグナム達も、忙しい時にごめんな？」
そして次の言葉を自身を守る騎士達へと向けた。
「いえ、私たちはあなたの騎士ですから」
はじめに答えたのはピンクポニテの美女、シグナム。主であるはやての言葉に恭しく頭を下げる様は、まさに騎士のそれだ。
「ま、固いこと言うのはなしってことだ」
「うんうん、ヴィータちゃんの言う通り」
次いで答えるのは赤髪を三つ編みに纏めた幼い少女、ヴィータ。そしてその隣で朗らかに笑う金髪ボブカットの女性、シャマル。そしてその傍らにて腕組みし、無言で頷く獣人の男性、ザフィーラ。
彼女達もシグナム同様、はやてを守る騎士達である。
皆の賛同を受けたはやては一つ頷き、モニターにある画像を映す。そこはミッドチルダとは別の世界で、燃え盛る炎に包まれた画像だった。
「これはつい数ヶ月前、管理世界のある村で起こった事件の映像や」
「これ、村全部が燃えてるの……？」
映し出された画面を埋め尽くす炎になのはは小さな声で呟く。おそらく夜に撮られた景色だというのに、昼のように明るいその様は燃

え盛る業火の勢いを物語る。
「この大火災での死傷者は幸いにも少なかった……やけど」
「けど、どうしたの？」
「……この一件で行方不明となった人が約二百名。しかもそのどれもが魔力を持った人ばかりなんや」
　はやての言葉に息を飲むなのは達一同。二百名近くの行方不明者など、津波などであればまだ分かるが火災となれば話は別だ。
「大火災の裏に隠れた、もう一つの事件があるってことか」
「でも、いったい誰がそんな数の人を……」
「そこや。二百もの数の人を気がつかれずに攫うなんて、火災に隠れたとしても至難の技や。でも、その手がかりとなるものが一つ」
　モニターをコントロールし、次なる映像を映し出すはやて。そこには場所は変わるが、業火に包まれる村の光景が。
「これはたまたまこの村を訪れていた人が撮った映像や」
「それはわかりましたが、この映像が人攫いに何の関係が？」
　画像が映像に変わっただけで、燃えた村が映っていること以外何も変わった様子は見られない。
　シグナムの問いにはやてはさらにモニターをコントロール。映像が徐々に拡大され、炎の包まれたある一点を映し出す。
　そこには炎の中逃げ惑う一人の男の姿があり、助けを求めて傷ついた体を引きずりながら歩いていた。だが次の瞬間、その姿はまるで煙のように掻き消える。
「え、人が消えた？」
「これをスローで流すと……こうなるわけや」
　驚くフェイトに視線を向けつつ、はやてはさらに操作を続ける。すると映像が巻き戻されスローモーションで流される。
　ゆっくりと動く映像。それに従い、巻き戻された男もその歩みを遅くする。そして男が消えた地点へと辿り着いた時、映像に変化が現れた。
　それは男の横の空間、まるでナイフで切られたかのように縦に二つへ裂けたそこから、突如一つの影が飛び出す。それはスローモーショ

ンで流しているにもかかわらず、素早く男の体を掴むと裂け目の中へと引っ張りこむ。
「今出てきた影、これをさらにスローで流すと……」
再び巻き戻され、そしてさらにスローで流される映像。そこに映し出された影の正体は、全身が灰色の人狼を模した異形の姿だった。
その異形の姿になのは達は口を閉ざし、険しい表情でモニターを見つめる。
「空間を裂いて人を……」
「つまりはこいつが誘拐の犯人ってことか」
その光景に唖然とするシャマル。対しヴィータは睨みつけるように目を細め、モニターに映る人狼を見続ける。
ヴィータの言う通り、この人狼の異形が火災に紛れて人々を誘拐したのは間違いないだろう。
「目的も何もわかっとらんけど、この異形達が何かをしようとしていることは確かや」
「達ってことは、他にも仲間がいるってこと？」
「そうや。ここ最近頻繁になった魔導師の失踪、おそらくこの異形が何かしら関わっているのは間違い無いと思う」
魔導師失踪。ここ1年近く前から急に増加しだした、管理局が頭を悩ませている一件だ。なにせ目撃情報がなく、誰がどのようにして局員を拐ったのかがわからない。
「今はこの映像一つしか手がかりと呼べるものがない。けど、相手がどういったものなのかは知ることができた」
「あとはこれからの相手の出方次第、というわけですね」
「つっても、これじゃ後手に回り続けるだけだぞ。どうにかあいつらの動きを予測しねぇと」
ただでさえ相手はとんでもない移動手段を有しているのだ。何か手を打たなければイタチごっこになるのが目に見えている。
だが相手の情報が圧倒的に少ない現状では、動きを予測をするのも困難。その事実になのは達は表情を険しくする。
「レリックにカリムの予測。それに加えて魔導師失踪事件……ほん

ま、やることてんこ盛りやなぁ」
「でも頑張らないと。そのために創った『夢の部隊』、でしょ？」
「……そうやね」
微笑むなのはにつられ、はやても口元に笑みを浮かべる。

――機動六課始動、一週間前

場所は変わりミッドチルダ北部。
月明かりのみが照らす薄暗い街道に小さな影が一つ。
「もう少し、あと少しで……」
幼い体を動かしつつ、懸命に走る少女。どこか焦燥を孕んだ表情で走る姿は、まるで何かに追われているようで。
「早く、あの人の元へ……」
青い双眸は真っ直ぐに、進むべき道を見つめ。
「そしてどうか、どうか私を――」
絞り出すように吐き出した言葉は、とても、とても重く……。

場所は変わりトオルのマンション。
朝日がカーテンから漏れ、開いた窓から涼やかな風が入り、椅子に座るトオルの肌を撫でる。
淹れたてのコーヒーに口をつけながらテレビへと視線を向けるトオル。
「はい、朝ご飯ですよトオル」

その言葉とともにキッチンからやってきたのは、白いエプロンを身につけたエルピスだ。白い長髪を赤いリボンで一纏めにしたエルピスは、その手にお盆を持ちトオルの座る机へと朝食を運ぶ。
「ん、ありがとなエルピス」
トオルはエルピスからお盆を受け取り机にそれらを並べていく。皿を並べきったところでエルピスも椅子に座り、二人合わせて朝食を食べ始める。
「にしてもエルピス、お前料理作れたんだな」
「ふふ～ん。こう見えても私はずっと家事をしてきましたから！　炊事洗濯お手の物です！」
トオルの褒め言葉に鼻を高くし笑みを浮かべるエルピス。彼女のおかげで家事が今までよりも楽になったことは、トオルも素直に感謝している。
ここ数日、ワイバーン以降のファントムの襲来もなく、穏やかな日々を過ごすことができた。いつ襲撃して来るかわからないので気は抜けないが、それでもこうした日常を謳歌するのも悪くはないだろう。
エルピスの作ったハムエッグを口に含みつつ、テレビで流れているニュースへと目をやる。
（古代遺物管理部機動六課。スバルの話だと確か明後日には始動するんだっけか……）
管理局関連のニュースが流れ、妹分の新たな職場のことが頭に浮かぶ。過剰戦力と言っても過言ではない程の実力者が揃った部隊、さぞスバルにとってもいい経験となるだろう。順調に魔導師としての道を進んでいくスバルに安心すると同時に、若干の不安も覚えるトオル。
（ファントム、なんでスバルとティアナちゃんを狙ったのか）
偶然か、それとも彼女たちに襲うに足りうる『何か』があったのか。いずれにせよ、今後のファントムの行動をいかに早く察知するかが大事になるだろう。
そのためには使い魔の二体にの存在は必要不可欠だ。プラモンス

ターたちはファントムの魔力に反応するので、これ以上のうってつけはいない。
それにスバルやティアナだけではない。エルピスを狙って襲ってくるファントムにも十分に警戒を払わなければならない。
「今日はお仕事お休みなんですよね？」
「ああ。だから今日は1日ゆっくりだ」
そう言いコーヒーに口をつける。
するとピンポーン、とインターホンが鳴る音が聞こえてきた。
「ん？　誰だ、こんな朝早くから」
今はまだ早朝。客にしても訪ねてくるのには些か時間が早すぎる。
とはいえ放置というわけにもいかず、訝しげな表情で立ち上がり玄関まで向かう。
そして玄関の扉に手をかけようとしたその時、トオルの視界が一瞬、白で埋め尽くされた。それはプラモンスター達からの連絡で、白い視界の中に一つの映像が流される。
（こいつは、ファントムを見つけたのか？）
はやる気持ちを抑えつつ、トオルは流れる映像に目を向ける。
映像には白いシャツに赤いスカートを着た水色の髪の幼い少女の後ろ姿が映されており、その少女はどこかの家の扉の前に立っていた。
（女の子……？　それに、その扉って）
映像に映る見慣れた扉。もしかして、とトオルが思った矢先、映像に映る少女は扉のインターホンへと背伸びで手を伸ばし
――ピンポーン
ほぼ、いや全くの同時だった。少女がベルを押すタイミングで鳴った自宅のインターホン。そこで映像は終わり、トオルは元に戻った視界で改めて目の前の扉を見つめる。
この扉の向こうにいるのはあの少女で間違いはないだろう。だとすれば何故、彼女はトオルを訪ねてきたのか。疑問が募る。
「……ま、このままじっとしてても始まらねぇか」
覚悟を決め、トオルは鍵を開けてドアノブをひねる。そして扉の向

こう、トオルの視界に見えてきたのは映像の少女。
映像越しで見るよりもはるかに小さなその容姿は小学生ほどで、彼女は青い瞳で上目遣いでトオルを見上げる。
「えーと……君、俺に何の用かな？」
「……いが……ました……いさん」
尋ねると、ごによごによ、と何やら少女の口が小さく動く。しかし声が小さすぎてなかなか聞き取れない。
トオルが再度、少女に問いかけると、少女は意を決したのか先ほどよりも大きな声を出す。
「お願いがあって、来ました……魔法使いさん」
少女の放った言葉にトオルは目を見開く。
魔法使い、そのことを知っているのはエルピスかファントムのみ。それを知っているということは、目の前の少女はおそらく……。
だが争おうとする気配は一向に見られないので、トオルは一度深呼吸し気持ちを整理すると
「……とりあえず、中に入ってくれ」
少女を自宅へと招いた。

「……」
「……」
「……」
リビング。先ほどまでトオルとエルピスだけだったそこには、癖のある水色の髪の少女が二人の対面に座っていた。流れる空気はお世辞にもいいとは言えず、トオルとエルピス、そして少女は各々緊張の面持ちをしている。
そんな中、初めに口を開いたのはトオルだ。
「それじゃあ君が誰なのかと、ここに来た理由を教えてくれるか？」
「……はい」
小さく頷き、少女はゆっくりと口を開く。
「私は、ファントムです。名前は『ダインスレイブ』って言います」
ダインスレイブ、そう名乗る少女。彼女がファントムであることは

薄々感づいていたので、トオルは別に驚きはしない。隣のエルピスも彼女の中の魔力を感じ取っているのか、落ち着き払った表情をしている。

トオルが視線で話を促すと、少女は続けて口を開く。

「私は、あなたにお願いがあって来ました」

きた、玄関でも言っていた『お願い』。彼女がいったい何をお願いしたいのか、大方賢者の石関連であろうとトオルは推測する。

そして一拍呼吸を置き、少女は今までで一番大きな声で言う。

「魔法使いさん――――私を、殺してください」

場所は変わり、ミッドチルダのどこか。

そこには一人の男が歩く姿が。イラついているというのを一切隠さない男は、不快に顔を歪めて街を歩く。

「チッ、なんだってボスはあんな半端モンに！　俺だったら確実に魔法使いを殺れるのによ！」

ボスであるローブの男の言葉を頭の中で思い返し、ナーガは不愉快そうに舌打ちを一つ。

周囲の人はそんな彼を避けるようにして歩き、またヒソヒソと会話をするがナーガは我関せずとばかりに歩みを進める。

「クソが、あんな半端モンさえいなけりゃ！　そうすれば俺が――」

ぴたりと、ナーガの足が止まる。

「ああそうだ、あいつさえいなけりゃ俺が魔法使いとやれる」

そう、賢者の石の回収を任されたあのファントムがいなくなればいい。偶然、何かしらの想定外の出来事で死んでしまえば、空いた穴を自分が埋めることができる。

その顔には名案を思い付いたと、そう物語るような狂気を孕んだ笑みが。

「ははははっ、こいつは楽しくなりそうだ！」
先ほどと打って変わり上機嫌に歩き出すナーガ。
不穏な空気を纏う彼を表すかのように、ミッドの空には黒い暗雲が立ち込め始めた。

「殺してくれ、だと……？」
少女、ダインスレイブの口から告げられた『お願い』。その内容は『自分を殺すこと』。
予想外の内容にトオルは思わず持っていたコーヒーを落としかける。だがそれも仕方のないことだ。敵であるはずのファントムが『殺してくれ』と、そうお願いしてきたのだから。
エルピスもまた驚いているらしく、今にも立ち上がりそうな雰囲気を出していた。
「はい、ですのでどうか……お願いします！」
「ちょちょっ、待て待て待て！　とりあえず待ってくれ！」
「なぜ、ですか？　魔法使いとは私たち、ファントムを倒す存在だと、そう伺ったのですけど」
コテン、と可愛らしく首を傾げるダインスレイブ。しかしトオルからしてみれば、無抵抗の誰かを殺すなどたまったものではない。
とりあえず、なぜ彼女が自分を殺したいのか。その理由だけでも聞いておかなければと、トオルは質問をする。
「その、殺す云々は置いといて……なんでそんなお願いをしたのか、理由を話してくれるか？」
「……私は、誰かを傷つけたくない、です。これ以上、誰かが傷つく姿、見たくないんです……！」
泣きそうな、悲痛の面持ちで語る少女。
どうやら彼女にはファントムとしてのもう一つの人格があるらし

い。その人格は非常に好戦的で、血を見るのが好きなんだそうだ。
関係ある者も無関係な者も巻き込んで傷つける、そんなもう一人の自分。そんな自分を彼女は止めることができない。だから自分を殺してくれるであろう魔法使い、トオルの元を訪ねたとのことだ。
「……私にできるのは、彼女の力を抑えることだけです」
「なるほど、話はだいたい理解した。ただもう一つだけ、質問してもいいか？」
了承を得て、トオルは再度ダインスレイブへと質問する。
「君はファントムだろう？　なんで、そこまでして人を守ろうとするんだ？」
「……それは、私があの子の記憶に強く影響されてるから、だと思います」
「記憶に影響……？」
「そこからは私が説明をしましょう」
首を傾げるトオルにエルピスが説明をする。
「ファントムとは絶望した人間から生まれる、ここは話しましたね？」
「ああ、確か初めて会った時に聞いたような……」
「ファントムは核となった人物の記憶を朧げながらも有しているんです。いや記憶という名の情報、といったほうがいいですね」
ですが、と続け
「基本ファントムは核となった人物の人格とは全くの別人になります。それでも彼女のように記憶に影響を受けるということは、それだけ元となった子の思いが強かったのでしょう」
「……記憶の中のあの子は、とても優しくて暖かくて、お日様のような子でした」
そう語るダインスレイブの表情はこの場で初めて見せる微笑み。それほどまで、彼女にとってその子は特別なのだろう。
だがその表情もすぐに曇ってしまう。
「私は、あの子の体で、これ以上人を傷つけたくない。優しいあの子に、傷つけて欲しくない……」
「だからこれ以上罪を重ねる前に死のうと、俺のとこに来たわけか」

「はい。勝手なことだと、わかってます。ですが、どうか……私のお願い、聞いて貰ください」
そう言い深々と頭を下げるダインスレイブ。理由を聞いたトオルは腕組みし、目を瞑って考え込む。そんなトオルの隣では、エルピスが同じく口を閉ざしたまま静かに座っている。
そして1分、トオルは組んでいた腕を崩し目を開く。そんなトオルにダインスレイブは視線を向け、彼の答えを待つ。
「ダインスレイブ、俺の答えを言うぞ」
少女の体がわずかに跳ねる。緊張と期待と、様々な感情が入り混じった顔で、それでも通るから目を離さず。
そんなダインスレイブへトオルもまた、その視線を逸らすことなく真っ直ぐに見つめ

「悪いな、俺は君の頼みを聞けない」
その言葉に、ダインスレイブはゆっくりと瞼を下ろす。
「君の思いはわかった。どうして俺の元へ来たのか、あんなお願いをしたのか」
それでも彼女の頼みを聞くことはできない。例えどれだけお願いされようと、この答えは絶対に覆らない。
だって、目の前で座る彼女はこんなにも
「だって君は、こんなにも優しい子じゃないか。そんな君を手にかけるなんて俺にはできない」
この答えはただの我が儘だ。目の前の彼女の気持ちを、勇気を無下にするものだ。
でも、それでも、トオルは剣を握らない。握る理由がないから。
「俺に君は斬れない。だから別の形で君の力になろうと思う」
その言葉に少女の目が見開かれる。驚きがありありと見て取れる表情だ。
だってまさか、他の方法を提示してくるとは思わなかったから。断られたまま、そのままで終わると思っていたから。
ダインスレイブの表情を見て、ふっ、と微笑むトオル。

頼みは聞けない、だからと言ってこのままさよならは後味が悪い。放っておけば、彼女の手で犠牲者が出るのは目に見えている。それがこの子のしたくないことだとしても。それを止めるのは魔法使いとしてファントムと戦う自分の使命だ。

そうでないとしても、目の前で泣き出しそうな少女を見ていると、嫌でも思い出す。あの日、一人の女性の遺影の前で泣く、二人の少女の姿を。

「力になるって言うなら、それこそ私を……」

「それじゃ君が救われないだろ。大丈夫、俺とエルピスに任せておけって。な？」

「ふふっ、トオルならそう言うと思っていましたよ。さすが、私の相棒です！」

ウィンクを飛ばし、笑顔を浮かべるエルピス。彼女も力を貸す気は満々だ。

乗り気な二人にダインスレイブはただただ困惑する。なぜ、そこまで親身になって力を貸してくれるのか。勝手に押しかけて、勝手にお願いして、ただの迷惑者でしかないはずの自分になぜそこまで……。

「なんで、私なんかを……」

「なんでも何も、伸ばされた手を無視はできない、ただそれだけだ」

この手で剣を握るのはやめた。だから代わりに目の前の少女の手を握ろう。これまで必死に彼女の中の『少女』を守ってきた、心優しい彼女の手を。

笑顔とともに差し出す右手。ダインスレイブは差し出されたその手に戸惑い困惑する。本来だったら自分を手にかけるはずのその手が優しく広げられている、その光景に。

だが混乱する意識とは裏腹に、彼女の右手はゆっくりと動き、差し出されたその手を取る。二人の手の大きさに差があり、握るというよりも『包み込む』という形になる。

（……あったかい）

包み込む右腕から伝わる暖かさ。それは心にまで伝わり、ポカポカと胸を温めてくれる。その感覚はまるで、記憶の中の少女と同じお日

様のようで。
「あーっ、二人だけずるいです！　私も混ぜてください！」
トオルの右腕を包み込むように、エルピスは両手を重ねる。
手と手は繋がった。残すは問題の解決のみ。

取引

「それで、いったいこれからどうするんですか？」
　ダインスレイブを助ける。そう約束をしたはいいが、主だった作戦は決まっていない。首をかしげるエルピスの問いに対し、トオルは腕組みをしつつ答える。
「厄介なのが二人は一つの体を共有してるってところだな。そこをどうにかできない限り、手の出しようがないな」
　もう一つ人格と呼べる、争いを好むダインスレイブ。二人が同じ体を使っているという事実、これほどやりづらいものはない。無理に人格を引き剥がそうものなら、こちら側のダインスレイブにも影響が出ないはずはない。
　となると、残された道は一つ。トオルは組んでいた腕を解き、ダインスレイブへ向けて言葉を投げかける。
「よし、じゃあ散歩にでも行くか」

　トオルの一言により、エルピスとダインスレイブが訪れたのは町から離れた場所にある公園。遊具という遊具もなく、ただ砂場がポツンと一つだけあるその公園には大人はおろか子供の姿すらない。
　そんな物悲しい雰囲気が流れる場所へ訪れたトオル達三人。現在、公園唯一のベンチへと腰をかけ、ぼんやりと日向ぼっこを決め込んでいる。
「あぁ、今日もいい天気だな……」
「それはそうですが、その……いいんですか？」
「んー？　なにが？」
　気の抜けた返事に肩を落とすエルピス。
「だから、彼女の悩みを解決するんでしょう？　こんなところでゆっくりしていてもいいんですか？」
「おいおい、俺がなにも考えてないとでも思ったか？　ここに来たの

もちゃんと理由があんだよ」
さすがに何か考えがあってのことだったようだ。早とちりした自分を叱責し、エルピスはトオルの考えに耳を傾ける。
よっこいしょ、という些かオヤジ臭さを感じさせる一言とともに腰をあげ、そしてベンチの隅で小さく座り込むダインスレイブの正面へと移動する。
「今から俺が言うこと、聞いてくれるか？」
勤めて優しく、目の前の少女へ声を掛ける。そんなトオルの頼みにダインスレイブは小さく、だがはっきりと頷いた。
自分を見上げる目は覚悟を決めており、トオルは今から彼女に伝える言葉を頭で反芻させる。
これから言うことは、きっと彼女にとって辛いものだ。きっと言葉にすれば彼女は困惑するだろう。
だが彼女の命を奪わず救うにはこの方法しかない。頭が硬い自分が考えられる最善の策、それは……
「もう一人の君と入れ替わってくれ。俺が彼女と話をつける」
「――っ！」
自分が考えられる最善の策。それはもう一人のダインスレイブとの対話だった。
もう一人の彼女を説得すれば、彼女を殺すことなくその願いを叶えることができる。それがトオルの考えだった。
「彼女と、入れ替わる……」
震える小さな体。
彼女は恐れているのだ。入れ替わった後、もう一人の自分がなにをするのかを。
『トオル、それはあまりにも……』
『わかってる。けど、これが俺が考える最善の方法だ』
震える少女の姿に、たまらずエルピスが念話を送ってくる。トオルはそんな彼女に視線を移し、首を横に振り一蹴する。
確かにダインスレイブにとってこの頼みは酷なことだろう。だが

それでも彼女にはやってもらわなければならない。彼女の願いのために、彼女に生きてもらうために。
一歩、トオルは足を前に進める。そして膝を曲げベンチに座る彼女と目線を合わせ、もう一度優しく声を掛ける。
「入れ替わるのは怖いか？」
「……はい」
申し訳なさそうに呟く声は消え入りそうなほどか細いもので。
スカートの裾をぎゅっと握りしめ、ダインスレイブは震える声で続ける。
「彼女と入れ替わったら、きっと暴れます。もしそうなったら……」
「ああ、近くにいる俺たちが真っ先に襲われるな」
「……魔法使いさんたちは、こんな私に親身になってくれました。そんな人たちに、怪我をさせたくありません……」
ここまで来て他人の心配をする少女の優しさにトオルは笑みを浮かべ、澄んだ青空のような髪へ片手を乗せる。
「ははっ、やっぱり君は優しいな。けど……」
ガシガシと、乱暴に頭を撫で回す。頭を前後左右に揺さぶられ「あわわわわ」と、ダインスレイブは困惑の表情を浮かべる。
一通り撫でたトオルはその手を止め、しかし手は頭に乗せたまま話を続ける。
「んな顔すんなって。別に死ににに行くわけじゃねーんだから」
「でも……」
「そんなことより自分の心配しとけ。もし戦闘にでもなったらたんこぶじゃすまねーぞ？」
緊張を和らげるためポンポンと頭を叩き、水色の髪から手を離す。先ほどよりも表情は幾分か良くなったものの、まだどこか不安を抱いた様子のダインスレイブ。
どこまでもお人好しな奴だと、トオルは苦笑する。きっと彼女にとってトオルはどこまでいっても人間で、だからこそ不安になるのだろう。
そんな彼女の不安を和らげる手段、そのとっておきをトオルは使用

する。
「それによ、俺は魔法使いだ」
　その言葉に、はっ、とダインスレイブは顔を上げる。その先にはサムズアップするトオルの姿が。
「信じろ。君が頼った男は、そう簡単にくたばらないって」
「……わかりました」
　覚悟を決めるダインスレイブ。
「その……彼女を宜しくお願いします！」
「ああ、俺に任せておけ」
「私たちに、ですよ！」
　仲間外れにはされまいと、最後の最後で会話に割り込んでくるエルピス。トオルの腕にしがみつき、体全体で意思表示を示す。
　そんなエルピスにダインスレイブは小さく笑みを零し、そしてそっと両の目を閉じる。
　そして数瞬後
「――ハッ！　随分と勝手言ってくれるじゃねぇか！」
　先ほどまでのおとなしい口ぶりから一転、まるで不良のように荒げた言葉遣いに変わる。それだけでトオル達は、彼女たちが入れ替わったことが理解できた。
　その証拠に開かれた双眸は海のように澄んだ青色から、血のような鮮やかな赤色へと染まっている。
「『俺』と会うのは初めましてだな、魔法使い」
「……お前がもう一人のダインスレイブか」
「応とも！　俺に関しての話はあいつがしたことだし、省略させてもらうぜ？」
　ベンチに踏ん反りかえるようにして座り足を組む。仕草一つとっても彼女とはまるっきり正反対なようだ。
　そして彼女の口ぶりからするに、人格が表に出ていなくともその間の記憶は共有しているらしい。ということはダインスレイブがトオル達の家を訪れ、そしてなにをしたのかも知っているのだろう。
「そうか、なら話す手間が省けたな」

人格が違うとはいえ、同じ姿の少女に同じ話をするのは面倒だ。話の内容を相手が理解しているのならばそれに越したことはない。
「単刀直入に言う、これ以上悪戯に他人を傷つけないで欲しい」
「……ハッ！　やだね！」
トオルの言葉を一蹴した直後、ダインスレイブは拳を握りしめ殴りかかる。突然のことに反応が遅れるも、すんでのところで腕をクロスしガードに成功。
しかし見た目は子供であってもファントムはファントム、力任せに振り抜かれた拳はガードもろともトオルの体を吹き飛ばす。
「ぐぅ……ッ！」
「トオル！」
吹き飛ばされたトオルへ駆け寄り手を差し出すエルピス。「すまん」と、彼女の手を借りて立ち上がり視線をダインスレイブへと戻す。彼女はすでにベンチから離れた場所に立っており、右手に歪な形の剣を出現させていた。
彼女の持つ剣はおそらくは西洋の両刃の剣なのだろうが、なぜだか片方の刃がない。赤黒く染まった片刃の剣の切っ先をトオルへと向け、笑みを崩さぬまま赤い双眸で射抜く。
「話をつける、だっけか？　甘ぇんだよ。俺がそんなもんで改心するとでも思ったか」
挑発でもしているのだろうか。ダインスレイブは口元をニヤリと歪め、剣の切っ先で円を描くようにくるくると回す。
「ほら、お前も獲物を出せよ」
「……」
戦いを望むダインスレイブに対し、トオルは無言で彼女の瞳を見つめ返す。
約束をした、決して傷つけないと。手を握った、優しい彼女を守ろうと。であるならば、自分がここでとるべき行動は剣を握ることではない。
「ファントム……一つ取引をしないか？」
「あぁ？　取引だあ？」

「ああ、これはお前にとっても決して悪い話じゃない」
「ほー……それで？　んじゃ聞かせてもらうが、その取引ってのはなんだ？」
　悪い話じゃない。その言葉にダインスレイブは興味を惹かれたのかそう問い返す。
　彼女の反応にトオルは内心笑みを浮かべると一度呼吸を整え、そして口を動かす。
「お前、俺と一緒に戦う気はないか？」
「へぇ……」
　トオルの一言にダインスレイブはわずかに目を見開き驚きを表す。それもそのはずだ、まさかファントムである自分を勧誘してきたのだから。
「先の問いかけでお前に戦うなというのは無理だとわかった。だから」
「だから代わりに戦う場所をくれてやると……。矛先を人ではなく同胞へ向けろってわけか」
「ああ……お前は相手は人だとかそういうのは関係ないタイプだ。必要なのは『戦えるか』この一点だけ。なら、ファントムに狙われている俺たちと共に戦えば自然と戦う場は増える」
「なるほどな……確かに俺はお前の言う通り戦えれば相手は誰だっていい。その点で言えばお前の取引は実に魅力的だ」
　ダインスレイブにとってトオルが持ちかけてきた取引は悪くはない。むしろ人よりも頑丈なファントムを相手にできる分、戦いの質は増すだろう。
　だがダインスレイブは承諾はせず、しかし、と言葉を続ける。
「俺は人間を手にかけてきた、その点はどうする？　まさかチャラにするってわけじゃねえだろ？」
「もちろんだ。ただ過去はどうやったって覆らない、取り返すなんてことはできやしない」
　過去に戻れればと、これまでに何度望んだことだろう。あの日、師と仰いだ人達がこの世から去ってしまった日から何度も、何度も

……。
　だがいくら望もうと時間が戻るなんてことは叶わなかった。失ったものが戻ることなどなかった。
「だったらこの未来（さき）は善く生きろ。お前には戦うことこそが正義なんだろうが、ならせめて苦しむ人を助けてみろ」
「ハッ、俺に正義（ヒー）の味方（ロー）になれってか？」
「別にそこまで求めちゃいないさ。ただ『悪の敵』になってくれればそれでいい」
「悪の敵、か……ハハッ――ハハハハハッ！」
　腹を抱え爆笑するダインスレイブ。腹が捩じ切れるほどツボにはまったらしく、地面を右へ左へ転げ回り笑い続ける。
　そして約1分後、ようやく笑いが収まったらしく、だがまだ余韻が残っているのか口元を綻ばせながら立ち上がる。
「悪の敵……敵、か。いいね、俺にぴったりな言葉だ。俺の好きに暴れられるという点もベスト」
「なら……」
「ああ、応じてやるよお前の取引に！」
　取引成立。これで彼女との約束は果たされた。彼女を傷つけることなく、剣を握ることなく。
　無事にことを終えられたことにトオルは安堵し、ふぅ、と重い息を吐く。
『お疲れ様です、トオル』
『ああ、一か八かの策だったけどどうにかうまくいってくれてよかった』
『まさかトオルの考えていた策があの様なものだとは思いませんでした。正直言ってびっくりです』
『俺の勝手で決めちまったが、お前はいいのか？』
『ええ、トオルが決めたことです。私からは何も言うことはありません』
　自分の独断で決めた取引だったが、どうやらエルピスも納得してくれている様だ。仲間内で揉める様なことにならなくてよかったと、も

う一度安堵で息を吐くトオル。
「それでお前さんの仲間になったわけだが……」
「ああ自己紹介がまだだったな。俺はトオル・ミツハネ、そしてこっちが」
「エルピスです、宜しくお願いします！」
「おぅ。知ってるとは思うが、俺はダインスレイブだ、よろしくな」
取引とはいえ仲間になったトオルたちは互いに自己紹介をし合う。しかしこれ以上ここで長話をするのもアレなので、一先ずトオルの自宅へ帰ろうと公園の出入口へ足を向け――その先にいる人物を見て踏み出したそれを止める。
黒のシャツとジーンズというラフな格好をした厳つい顔の男。トオルは初対面のはずなのだが、なぜかその男はこちらを見てニヤニヤと下卑た笑みを浮かべている。
「よぉ、久しぶりじゃねぇか……ナーガ」
そんなトオルの疑問を解決したのは、自身の隣で睨みを効かせるダインスレイブだった。
「知り合い……てことはあいつは」
「ご察しの通りファントムだよ」
やはりファントム。トオルが視線を男――ナーガへ戻すと、彼は一層下卑た笑みを深め
「よぉ会いたかったぜ魔法使い……と、それに半端モン」
「俺は別に会いたくなかったけどな。にしてもおかしいな、なんでテメェがこんな場所にいる。お前の出番はまだだっただろ」
「はて、何のことかしらねぇな。俺はただ散歩してただけで、そしたら偶然、魔法使いを見つけたってだけだ」
嘘だ。偶然なんかではない、このファントムは明らかに狙ってこの場所に訪れた。未だ口元に浮かべた笑みがそれを物語っている。
「そしたらどうだ、魔法使いから賢者の石の在り処を聞き出すために送られた同胞が、まさか魔法使いと肩並べて歩いてるとはよ！　これはあれだ、裏切りってやつだな！　悲しいぜ、まさか寝返るなんてよぉ！」

「にしては随分と嬉しそうじゃねぇか。正直に言ったらどうだ、『これで心置きなく魔法使い諸共　俺をぶっ潰せる』ってよ」
「……前々からお前のその態度がムカついてんだよ俺は。半端モンのくせして上から俺を見て……半端モンは半端モンらしく黙って隅っこで震えてりゃいいのによ！」
激昂しその姿を変化させるナーガ。蛇を模した異形へと変わった彼は、その手に鞭を構え襲いかかる。
「来た……エルピス！」
「はい！」
《ドラバーオン・カモーン‼？》
《ロード・カモーン！　イエス！　アドベント‼？　マイロード‼？！》
襲いかかってくるナーガを前に、トオルとエルピスは一瞬視線を交差させ変身。銀の装甲を纏った戦士、ロードへと姿を変える。
「へーそいつがお前の戦闘フォームか！　やっぱ戦いてぇな！」
「んなことより前見ろ、来てるぞ！」
《コネクト・カモーン！》
初めてロードの姿を目の当たりにしたダインスレイブは瞳を輝かせ、そんな彼女にロードはローブレイドバスターを取り出しつつ注意を促す。
「おらぁ！」
ナーガの手から振るわれる鞭。伸縮自在らしく、そこそこある距離も関係なく迫るそれを左右に飛び回避する二人。
「まだまだ、分かれな！」
ナーガの叫びとともに鞭の先端が二股に分離。各々がロードとダインスレイブを追尾する。しかもその鞭の先端には蛇の頭があり、噛みつかんと開いた口元からは毒のような液体が滴り落ちていた。
「追尾すんのか！」
『あわわわっ、蛇はちょっと苦手なんですよぉ！』
剣でなぎ払い接近を回避するロード。どうやらあちらも無事だったようで、獲物を仕留めきれなかった蛇たちは一度ナーガの元へと戻

る。
　その隙に再び合流するロードとダインスレイブ。
「つたく、相変わらずネチネチとしつこい野郎だ。武器にまでその性根がにじみ出てやがる」
「にしても厄介だなあの鞭。二つに分かれるし追尾するし、あとなんか毒みたいなもの垂れてるし」
「あの程度、捌くくらいわけねぇ。一気に懐まで潜り込んで叩き切ってやる！」
　そう言い、ダインスレイブは剣を構えると単身突撃。目の前から迫る獲物へナーガは再び鞭を振るう。振るわれた鞭は再度二つへ分かれ左右から強襲を仕掛ける。
　だがその程度ではダインスレイブにとっては攻撃と呼ぶには生温い。即座に剣で迫る蛇の双頭を弾き飛ばし、蛇は悲鳴をあげながら宙を舞う。
「んな程度で俺に傷つけようなんざ百年早えんだよ！」
「だから！　その上から目線を止めろって言ってんだ！」
　怒りの籠った叫び。
　直後、ダインスレイブは背後からの悪寒に、前に向けていた足を止めその場で大きく跳躍。すると先ほどまで彼女がいた場所を弾き飛ばしたはずの鞭の先端が通過する。
（あぁ？　確かに弾き飛ばしたはず……こんなすぐに追尾されるわけがねぇ）
　いくらなんでも早すぎる。疑問を胸にダインスレイブが視線を背後へ向けると、二つに分かれた鞭、その間から更にもう一つの鞭が伸びていた。
「まだ分離すんのか」
「驚いたか？　けどまだ早いぜ！」
　すると鞭が脈動し、さらに四つ蛇頭がダインスレイブ目掛けて追撃を仕掛ける。
「空中じゃ身動きとれねぇだろ！」
「あー確かにこれはかわしきれねーわ……けど」

《ロード！　ブラストストライク！　ガンガンガン！》
突如、背後から蛇の頭を撃ち抜く四つの銃弾。消し飛び、胴体である鞭ごと消滅する蛇。
ナーガが銃弾の発射元へ視線を向けると、そこには銃を構えたロードの姿が。
「忘れてるかもしんねーけど、今、二対一だぜ？」
「魔法使いィ！」
憎々しげに叫ぶナーガへ、無事に地面に着地したダインスレイブが肉薄。そしてそのまま右肩から左脇腹にかけて斜め一文字に斬り裂く。
「ぐぉあ⁉？」
「余所見禁物だバーカ」
たたらを踏み後退するナーガ。ダインスレイブはおまけだと言わんばかりにさらに三度、その身に斬撃を浴びせ最後に蹴りで吹き飛ばす。
「くそっ、なんで俺がテメェみたいな半端モンに！」
「そりゃ単純な実力不足だ。自分の力のなさを呪いな」
「このっ、なめやがってぇぇぇ！」
鞭を振るい、７つに分かれた蛇頭がダインスレイブへと襲いかかる。ダインスレイブは剣を構え、先ほど同様弾き飛ばそうとするが
《ジェミニ・カモーン！》
その横を二つの影が通過し、七つ全てを一気に吹き飛ばす。見ればそれは二人に増えたロードで、ブレイドモードのローブレイバスターを肩に担ぎながら顔だけを彼女に向ける。
「なんだよ、分身もできんのか」
「ん、まーな」
「そこまで長くは保たないけどな」
ジェミニウィザードリングの効果は強力だ。しかしその分その効果の持続時間は約1分と時間制約が付いている。だがそれでも自我

を持った分身を出せるのだからかなり便利な魔法と言える。
「さて、ここにこれ以上長居するのもアレだし、さっさと決着(ケリ)つけんぞ」
分身の方の自分が消え去るのを確認し、ロードはジェミニのリングを別のリングへと入れ替える。ダインスレイブもまた剣を握る手に力を込めると、刀身と同じ色の赤黒いオーラが彼女の体を包み込む。
とどめを刺しに来たことを感じ取ったナーガは鞭を振るい七つの蛇頭を仕掛けるも、それはもはやただの気休め程度にしかならない。
「道は俺が作る。そのあとは好きにしな」
『うぅ……極力蛇には触りたくありませんけど仕方ありませんね……』
《ルパッチ・マジック・タッチ・ゴー！　オーケー！　フルストライク！　ドゥーユーノゥ？》
幾重にも重なった銀の魔法陣を通過した蹴り――『ストライクロード』を放ち迫る蛇頭を鞭ごと消滅させるロード。武器を失い無防備な姿を晒すナーガへ、遮るものがなくなったダインスレイブが肉薄し
「――あばよ」
赤黒いオーラと共に一閃。確かな手応えを感じた彼女はゆったりとした足取りで横を通り過ぎ、血を払うように剣を薙ぐ。
「テメェ……裏切ったこと、後悔すんじゃ……ねぇぞ」
「誰も俺は、一度たりともお前らの仲間だなんて言った覚えはねぇ。俺はただ、俺が楽しめそうな方へ行くだけだ」
「その強がり、が、いつまで続くか……たのしみだ」
そう言い残し、ナーガは爆散。すると立ち上る爆煙の中から魔法陣が現れ、例のごとくロードの胸の中へと消えていった。
敵を倒し終えたところでロードは変身を解き、その体からエルピスが分離する。
「よし、終わったな」
「はぁ～……蛇、気持ち悪かったです」
「あー結構不完全燃焼だなこりゃ」
戦いも終わり両手を上にあげ伸びをするトオルと、ようやく蛇との

戦いから解放され安堵の息を吐くエルピス。そしてダインスレイブは先の戦闘に物足りなさを感じているらしく、やや不満気な表情を浮かべ頭を掻く。
「そんじゃ帰るぞお前ら。いろいろ話し合わなきゃならないこともあるしな」
「そうですね。運動したら汗をかいちゃいましたし、帰ったらシャワーを浴びましょう」
「あーもっと戦いてー」
そうして三人は公園をあとにする。
それからしばらくして、爆発音と爆煙を聞きつけた魔導師がこの場へ訪れるのだが、それはまた別のお話で。

騎士の力

薄暗い森の中、一人の女性がある場所へと向かっていた。艶やかな長い黒髪を闇に溶かし暗い夜道を迷いなく進んでいく女性がたどり着いたのは、木々がなく開けた小さな広場のような場所。

そこには身の丈ほどの長さの杖を持ち、黒と白の入り混じったローブを身に纏った男が立っており。

「カルキノス、ただいま到着しました……ボス」

「あぁ、よく来てくれた」

「それで、私をお呼びになった理由とは」

ボス、そう呼ばれた男はそういうと振り返り、懐から一枚の写真を撮り出しカルキノスへと渡す。

「数日後、この地の都市で事件が起こる。それに乗じこの人間を攫ってこい……それがお前の仕事だ」

「はい、確かに承りました。このカルキノスにおまかせください」

「良い働きを期待しているぞ」

そう言い残しローブの男はまるで陽炎のように姿を消す。

カルキノスは男がいた場所へ一度、深々と頭をさげると手渡された写真へと視線を移す。そこに写っていたのは青い長髪の楚々とした容姿の女性で。

「……ギンガ・ナカジマ」

写真の右下に書かれた名前をポツリと読み上げ、カルキノスは上着のポケットへそっと忍ばせた。

日曜の朝9時、トオル宅。

「妹が来る、ですか？」

こてっ、と可愛らしく首をかしげるエルピス。用意したコーヒーをテーブルに着くトオルへと渡し、彼女もまた対面に座る。

トオルはコーヒーに口をつけ「あぁ」と、一言返事を返す。

「妹というと、スバルのことですか？」
いつぞや、トオルの家でばったりと出会してしまった青髪の少女の姿を思い浮かべるエルピス。
しかしトオルは首を横に振り、否定の意を示し
「妹つっても二人いてな、今日は姉の方が来るんだよ」
「へぇ、もう一人妹さんがいたんですね」
もう一人の妹の存在にエルピスが感心していると、扉が開き寝間着姿のダインスレイブがリビングへとやってきた。
「おはよう、ございます……」
「おう、おはよう」
「おはようございます！」
寝惚け眼をこしこしと擦りながら、ペタペタと足音を鳴らしトオルたちの座るテーブルへと移動するダインスレイブ。
まだ眠いのか椅子の上でこっくりこっくりと船を漕ぐ彼女は、つい数日前に協力体制を結んだファントムであるなどと、事情が知らないものが見れば露とも思わないだろう。
「はい、朝食ですよ」
「あ、ありがとうございます」
エルピスから朝食を受け取り、そに小さな口に見合った量をチビチビと食べ始めるダインスレイブ。
彼女もファントムなので食事は必要ではないが、エルピス同様に食事を摂るようトオルに義務付けられている。
そんなダインスレイブの隣へ腰掛けると、エルピスは人差し指を頬に当てトオルへ質問する。
「そういえば、妹さんが来るのに私たちはここにいていいんでしょうか？」
スバルの時のように、自分たちがいることで何かトラブルが起きないかと心配したエルピスだが、トオルは再び首を横に振り
「ギンガには伝えてあるから心配すんな。エルピスは前にも言った通り居候で、ダインスレイブは知り合いに預かった子供って事にしている」

以前はスバルの突然の来訪でトラブルになりかけたが、今回はそこのところの根回しはすでにすんである。準備は万端というわけだ。
「んでもって、それに合わせてダインスレイブに一つ提案があるんだが」
「提案、ですか……？」
トオルにそう言われ、食事の手を止めるダインスレイブ。そして青空のような瞳を向けると、トオルは口を開き
「君たち二人の名前を分けようと思うんだが」
「名前を分ける……？」
こてっ、と首を傾げるダインスレイブに、トオルは続けて説明に入る。
「このままダインスレイブで統一してもいいんだけど、分けた方が何かと便利かと思ってよ。嫌だって言うんなら別にいいけど、君はどうだ？」
「そう、ですね……」
一度視線を落とし考えるダインスレイブ。1分に届くかどうかの時間考えた後、ゆっくりと顔を上げ
「トオルさんの提案に従います」
「もう一度言っとくが、無理に従う必要はないからな？」
「大丈夫です。お願いします」
そういうダインスレイブに、トオルは彼女の意思が変わらないうちに事を済ませようと、彼女たちの名前を口にする。
「それじゃ名前だが、君が『レイヴ』であっちの君が『ダイス』っていうのはどうだ？」
『ダインスレイブ』だから『ダイス』と『レイヴ』。いささか単純な分け方になってしまい、トオルはやや不安そうに彼女に尋ねると
「レイヴ、私の名前……あ、ありがとうございますっ」
どうやら無事に受け入れてくれたらしい。レイヴの反応にトオルは安堵の息を吐く。
「それじゃあこれからよろしくな、レイヴ」
「は、はい、よろしくお願いしますっ」

「それで、そのギンガという方はいつ来られるのですか？」
「そうだな、いつもだったらそろそろ来る頃だけど」
　するとまるでタイミングを見計らったかのように、ピンポーン、とインターホンが鳴る。
　トオルは椅子から立ち上がると玄関へ向かい、扉の鍵を解錠する。そしてドアノブを回し扉を開けるとそこには、青い長髪に白いリボンが特徴的な女性の姿が。
「久しぶり、トオル兄さん」
「おぅ、久しぶりだなギンガ」
　ニコリと柔和な笑みを浮かべる彼女の名はギンガ・ナカジマ。スバルの姉にしてトオルのもう一人の妹分である。
「立ち話もなんだし、とりあえず上がるか？」
「うん、お邪魔します」
　きちんと挨拶をし家の中へと足を踏み入れるギンガ。そのままトオルの背を追いリビングへと入り、中にいたエルピスとレイヴの二人と目を合わせる。
　エルピスはいつも通りニコニコと笑みを浮かべ、レイヴは緊張からかチラチラとせわしなく瞳を動かしギンガを見る。そんな二人の視線を浴びるギンガ本人もまた、エルピス同様に柔らかな笑みを浮かべている。
「紹介する、俺のもう一人の妹分のギンガだ」
「どうも、ギンガ・ナカジマです。兄さんから聞いてた通り、可愛い子達ね」
「エルピスと申します。訳あって、トオルの家で居候させてもらっています」
「えと、その……だいじゃなかった、レイヴ、です」
　新雪のように白く透き通った髪が靡く、笑顔の似合う少女エルピス。青空のように淡い水色の髪をした、オドオドと小動物を思わせる少女レイヴ。
　おそらく町で１０人に聞けば１０人が『美少女』だと答えるであろ

う容姿を持つ二人を見て、ギンガの笑みがより一層柔らかさを増す。
「ささっ、どうぞ腰をかけてください。あ、今お茶をお持ちしますね！」
「うん、ありがとう」
トテトテ、と小走りでキッチンへと向かうエルピス。彼女がお茶の用意をしている間にギンガは椅子へ座り、ふぅ、と小さく息を吐く。
どことなく疲れた様子なギンガに、彼女の正面に座ったトオルが声をかける。
「なんか疲れてるみたいだけど、どうかしたのか？」
「……兄さんも知ってるでしょ、ここ最近頻発している魔導師失踪事件」
「ああ、よくニュースで流れるからな。知らないって方が無理だろ」
少し冷えたコーヒーを口にし、トオルはギンガの質問に答える。
魔導師を中心に起こっている失踪事件。その詳細は管理局でも掴みきれておらず、真相は未だに闇の中とされている、世間で注目されている事件だ。
どうやらギンガはその失踪事件について色々と調査を行っていたらしく、そのせいでここ最近はひどく忙しかったのでそこまで休息をとれていなかったらしい。
「だったらこんなとこ来ないで家でゆっくりしとけよ。じゃねぇと体がもたないぞ」
「いいの、明日まで休み取ってるから。それに、兄さんに会うと落ち着けるしね」
「俺にはんなリラックス効果はねぇぞ。いいから早く家でゆっくりしろって」
「まあまあ、せっかく来てくれたんですし、少しくらい話をしてあげてもいいじゃないですか」
ギンガの分のコーヒーを用意したエルピスが、トオルの台詞を遮って会話に入ってくる。
コーヒーを受け取ったギンガはカップに口をつけ中身を少し飲むと、ほっ、と息を吐き

「うん、すごく美味しい」
「ふふっ、ありがとうございます」
互いに笑みを浮かべるエルピスとギンガ。
するとエルピスが何かに気づいたようにギンガへ質問をする。
「そういえば、ギンガとスバルはトオルの妹なんですよね？」
「ええ。でも血は繋がっていないから『妹分』だけど……幼い頃からずっと一緒にいたから、私とスバルにとっては本当のお兄ちゃんみたいなものかな」
そう言い、小さく笑みを浮かべるギンガ。そんな彼女の笑顔を見たエルピスもまた、口元を綻ばせ
「スバルもそうでしたけど、ギンガもトオルが大好きなのですね」
「えっ⁉？　え、ええっと、そうね……うん、大好き……かな」
「なに恥ずかしがってんだよ。昔はあんなに「お兄ちゃん大好き」って言ってたじゃねぇか」
はぁ、と息を吐きながら横目でギンガを見るトオル。そんな彼の発言にギンガは顔を赤くさせ、両手で机を叩き立ち上がる。
「もうっ、それは昔のことでしょ⁉？　恥ずかしいからそんなに掘り返さないでよ！」
「あー、あの頃のギンガは可愛かったなぁ。スバルと一緒に俺の後ろにくっついて」
「〜〜〜〜っ！　に、兄さんのばかぁ！」
目に涙を溜め、ぷいっ、とそっぽを向くギンガ。
「トオル、あんまりいじめるのは良くないですよ」
「まぁそう怒るなって。これも立派な兄妹のスキンシップってやつだ」
「……とてもそうには見えないのですが」
未だ顔を背けたままのギンガを見て、エルピスは兄妹のスキンシップとやらに疑問を抱く。
すると突如、ピピピピッ、という電子音が鳴り、ギンガは懐から通信端末を取り出すと、空間に小さなモニターが展開される。
そこに映し出されたのは、管理局の制服に身を包んだ灰色の髪の初

老の男性。彼はトオルの姿を目にすると、ニカリ、と笑みを浮かべ
『おおトオルじゃねぇか。久しぶりだな、元気にしてるか？』
「久しぶりっす、ゲンヤさん」
彼の名前はゲンヤ・ナカジマ。スバルとギンガの父親であり、トオルにとっても親父同然の男性である。
画面越しだがこうして顔をあわせるのは久しぶりの両名。互いに懐かしさに浸っていると、ギンガが咳払いをし話を進める。
「お父さん、私に用があるんじゃないの？」
『ああそうだった……実は今、クラナガンの銀行で立て篭り事件が起きてな。お前も応援に向かってくれねぇかと思って連絡したんだ』
「立て篭り……うんわかった、今すぐに向かうね」
『すまねぇな。現場の地図は送っておく……くれぐれも無茶はするなよ』
そしてモニターが消える。
「そういうわけだから、行ってくるね」
「あぁ、気をつけろよ」
「うん、また来るね」
軽く言葉を交わし、ギンガは足早にトオルの家を後にする。
バタン、と玄関の扉が閉まる音を聞き、エルピスはトオルへ話しかける。
「トオル、行かせても良かったんですか？」
「いいわけねぇけどよ……どうせ何言ってもとまらねぇよ。あいつは昔っから、困ってるやつがいたら助けに行くお人好しだからな」
「なるほど、さすがはトオルの妹ですね」
なんとなくだが、ギンガがトオルの妹だと納得するエルピス。
冷めきったコーヒーを口にしつつ、トオルは現場へ向かっているであろうギンガの心配をするのだった。

一方その頃、トオルのアパートを去ったギンガは、立て篭り事件が起きている現場へとたどり着いていた。

事件現場である銀行の前には多くの魔導師が集まっており、ギンガはその内の一人に状況を確認するため声をかける。
「陸士１０８部隊所属、ギンガ・ナカジマです。状況はどうなっていますか？」
「はい。立て篭り犯は男性が１名なのですが、女性一人を人質にとっています」
「犯人の持っている武器は？」
「銃を持っていて、動けば人質を殺すと言っており、迂闊に手出しができない状況で」
確かに人質をとられていてはそう簡単に手を出すことができない。しかも銃を持っているとなれば尚更、人質をどうにかするなど簡単だ。
「人質は一人だけですか？」
「はい。他の従業員や客は全員逃げだせたんですが、運悪く彼女だけが捕まったようで」
「申し上げます！　犯人が建物から出てきました！」
二人の話を遮り、現場の状況を観察していた男性局員が叫ぶように報告をする。
すぐさまギンガが建物へ目を向けると、そこには人質の女性を腕で拘束し、頭部へ銃口を向けている犯人の姿が。
「お、おらぁ！　動くなよ、動くんじゃねぇぞ！　少しでも怪しい行動してみろ、この女がどうなってもしらねぇぞ！」
叫びながら、壁に背をつけゆっくりと移動する犯人。どうやら人質を盾にこの場を逃げ出すつもりらしい。
犯人が外に姿を晒したのはいいが、人質をとられている以上こちらが下手に動くことはできない。
『私が時間を稼ぎます。その間に狙撃部隊を呼んでください』
局員の一人に念話で伝え、一歩前に出るギンガ。
「管理局員のギンガ・ナカジマです。これ以上の抵抗はやめて、おとなしく投降してください」
「う、うるせぇ！　誰が捕まるもんか！」

じりじりと、少しずつ、だが確実に建物の壁を伝う犯人。
『狙撃部隊の準備は？』
『狙撃にはまだもう暫くかかるそうです』
ギンガが念話で狙撃部隊の状況を確認するが、まだ時間はかかるらしく、ギンガは足止めをするべく犯人へと意識を切り替える。
その時、一瞬だけ人質の女性と視線が交差し
「――ふふ」
（……笑った？）
女性の口角が上がるのを見たギンガが、その笑みに疑問を抱いていると
「ようやく来ましたか。これで、この演技も終わりですね」
「お、おい、何言ってんだ？」
「さて、そろそろ離してもらいましょうか。いい加減、吐きそうです」
女性はそう言うと、銃口を向けられているのにもかかわらず、首元を絞める男の腕へと手を伸ばし
――ゴキッ、バキゴキッ
「あ、あがぁあああああ⁉？　う、腕が、腕がぁ！」
握りつぶされ骨を砕かれた男は地面へへたりこみ、滝のように汗と涙を流す。
まさか人質が犯人の腕を折って拘束を解除するなどという、想定外の事態にギンガがあっけにとられていると
「管理局というのは名ばかりの組織なのですか？　この程度の小物、すぐに始末すればいいものを」
ひどく冷めた声がギンガの意識を女性へと戻し、ギンガは慌てて女性へと質問をする。
「あ、あの、あなたは一体……」
「私ですか？　私はカルキノス、少しあなたに用がありまして、このような手段をとらせてもらいました」
「私に用、ですか……？」
自分に合うために人質になるという危ない手段をとった、そう語る女性にギンガは冷や汗を流す。

明らかに普通の人がする思考回路ではない。怪しさがにじみ出る女性に、ギンガは警戒しながら耳を傾ける。
「えぇ、とっても大切な用です」
「それで、その用とは……」
「なに、簡単なことですよ。だって――私と共に来てもらうだけなんですから！」
直後、女性の体が発光するとその姿が一変する。
蟹や蠍といった、まるで甲殻類を思わせるような体は焦げ茶色で統一され。肩部には棘が生え、両手首からは蟹のような鋭い鋏が生える。
異形へと変貌を遂げた女性に、ギンガはもちろん周りの局員たちも目を丸くさせる。
「あ、あなたは、本当に何者なんですか」
「深く知りたければ教えてあげますよ。連れ帰った後で、たっぷりと」
そして女性――カルキノスは鋏を構えるとギンガへ肉薄。いきなり襲い掛かってきたカルキノスに対抗すべく、ギンガはバリアジャケットを身に纏いプロテクションを展開。
一瞬の拮抗の後、カルキノスの鋏はプロテクションを破り、振り下ろすタイミングがずれたことでギンガは後方へ跳躍、直撃を回避する。
「ナカジマ陸曹！」
「援護します！」
ギンガが離れたところを狙い、他の局員たちが魔力弾を放ちカルキノスを狙い撃つ。
「この程度で攻撃のつもりですか？　魔導師とはこの程度なのですね……幻滅しました」
だがその堅牢な鎧には傷一つ付けることすら適わず、カルキノスは落胆の声と共に周囲の魔導師へ視線を向けると
「お見せしましょう。攻撃とは……こうやるのですよ！」
カルキノスが叫ぶと、両肩から生えた無数の棘が弾丸となり放出、魔導師めがけて一斉に襲いかかる。

棘の弾丸は局員のプロテクションを貫き、深々とその体へ突き刺さる。
「どうですか？　これが攻撃というものです……さて、邪魔者も減ったことだし、続きを始めましょう」
カルキノスがギンガへ視線を向けると、突如、彼女の周囲を魔力でできた道が駆け巡る。
『ウィングロード』と呼ばれるその魔力の道を走るのは無論ギンガだ。
「はぁぁぁぁ！」
縦横無尽に宙を駆けるギンガはカルキノスを翻弄し、無防備な背中へ魔力を込めた一撃をお見舞いする。
確かな手応えを感じとるギンガだったが
「ふふっ、いい攻撃ですね。うん、さっきの魔導師なんかよりも断然攻撃です」
「なっ、直撃したのに……ッ！」
「でも私に痛みを与えるにはまだまだ。さて、次はこっちの番！」
ダメージは愚か傷すらつかないカルキノスに呆然とするギンガは、薙ぐように振るわれた鋏の一撃をモロに受け吹き飛ばされる。
「抵抗するのは構わないですが、その時は相応の覚悟はしてもらいます。さて、どうしますか？」
「……あなたには、局で話を聞かせてもらいます」
「そう、後悔しないでくださいよ！」
ぶつかり合う両名。
振るわれるカルキノスの鋏をかわしながら、ギンガは『ウィングロード』を駆使し一撃を与え続けるが、堅牢な鎧に阻まれどれもダメージを与えるには至らない。
「ははは っ、無駄ですよ！　あなたの攻撃では、私の鎧を貫けない！」
カルキノスのいうとおり、ギンガの一撃ではあの甲殻を打ち破れない。しかしギンガは何度も何度も拳を打ち付け、カルキノスは余裕綽々とばかりにその拳を受け入れる。
そうして二人の攻防が繰り広げられること5分。
「はぁ、はぁ……」

宙を地を、縦横無尽に駆け回っていたギンガはスタミナ切れを起こし肩で息をする。
「おやおや、もうおしまいですか」
一方のカルキノスは疲労の色などいっさい見せず、疲労したギンガをみて嘆息する。
（おかしい、体が重い……いつもみたいに、力が出ない）
「顔色が悪いですよ？　どうやら体調がすぐれないようですね」
ここ最近の無理が祟ったらしい。いつものように体が動かず、動悸も激しく、足や腕に力が入らない。
分が悪い敵を前にコンディションも最悪。さすがにこのままで戦い続けては、どうなるのかは明白。
「安心してください、私には相手を甚振る趣味はないので……すぐに楽にして差し上げますよ！」
動きの鈍ったギンガへ、カルキノスはトドメを刺そうと鋏を振り上げ駆け出す。
その直前――
《ロード・ブラストストライク！　ガンガンガン！》
「なっ――ぐぁあああ⁉？」
「え……？」
突如、カルキノス目掛けて飛来した数発の弾丸がその体を吹き飛ばす。火花を散らせ視界から消え去るカルキノスに呆気にとられるギンガだったが、すぐさま視線を弾丸の飛んできた方へ向ける。
そこにいたのは、銀色の鎧に身を包んだ戦士。手形のついた奇妙な形をした銃を構えたその戦士は、目を丸くさせるギンガの元へと歩み寄ると
「ギンガ、大丈夫か？」
「え……あ、はい」
「後は俺が引き受ける。お前はさがってろ」
そう言い、戦士――ロードはカルキノスへと視線を向ける。
「まったく、不意打ちとはやってくれますね魔法使い」
「生憎と、敵に攻撃の合図を送るほど善人じゃないからな」

「まぁいいでしょう。本来の目的から逸れてはしまいますが、あなたを倒し賢者の石の在り処を持ち帰るとしましょう」
構え、カルキノスはロードめがけて駆け出す。対するロードも指輪を付け替え、迫るファントムへ迎撃の準備を整える。
『相手の外殻はかなりの硬度のようです。生半可な攻撃は意味を成さないですよ』
「わかってる。どれくらいの硬度か、まずは様子見だ」
《バインド・カモーン！》
ベルトを操作し、魔法陣から数本の鎖を出現させる。そしてそれを操り、接近してくるカルキノスの四肢を縛り上げ宙へ持ち上げる。そしてそのまま振り回し、遠心力を利用して地面へ叩きつけた。
まるで隕石でも落ちたのかと疑うほどの衝撃と破壊音が響き、大量の砂煙りが立ち上る。
ロードは煙の中、カルキノスの様子を静観していると
「まったく、荒々しい攻撃ですね」
呆れたような声とともに、煙の中から無傷のカルキノスが姿を現す。
ガーゴイルの時と同じく、あれくらいでは傷の一つもつけられないほどの硬度を持っているらしい。
「さて、私からもお返しをさせていただきましょうか――ね！」
カルキノスは双肩から無数の棘を発射し、上空へ打ち上げられた棘たちは雨霰となりロードを襲う。
降り注ぐ棘を前にもロードは慌てることなく、素早く指輪を付け替えるとベルトへかざす。
《ディフェンド・カモーン！》
その音声の後、ロードが右手を天にかざすと銀の魔法陣が展開され、それが盾となり棘を防ぐ。だがカルキノスは防御の隙をつきロードへ肉薄すると、自慢の鋏を振り上げて襲いかかる。
ロードも棘を防ぎきると即座に剣を構え、カルキノスの一撃を受け止める。そのまま鋏を打ち上げ、無防備になった胴体へと斬撃をお見舞いする。

「〜〜〜っ‼？　かってぇ！」
「その程度じゃ傷一つ付けられませんよ」
あまりの硬度に手が痺れ、その隙をついたカルキノスの一撃がロードを吹き飛ばす。
地面を二転三転し立ち上がるロードだが、未だに痺れが残っているらしく手首をぶらぶらとさせている。
「くそっ、やっぱ堅いなあの甲羅」
『ガーゴイルの時のように、一点狙いで破りますか？』
「……いや、多分無理だな」
ガーゴイルの時は、石化した状態では動くことができないデメリットがあったが、今回の相手は素であの防御力を有している。
一点集中で『ブラストストライク』を放ったとしても、回避されるのがオチだろう。
どうしたものか、ロードが現状を打破する方法を考えていると
『おいこらァ、トオル！』
「うおっ！　びっくりした……なんだよダイス」
ロードの頭に響いてきたのは、ダインスレイブの片割れ『ダイス』の声だった。なにやらご立腹らしく声を荒げるダイスは、怒りのままロードを怒鳴りつける。
『なんだよじゃねぇ！　俺に戦わせるって約束だろうが！』
「あー……そうだっけ？」
『しらばっくれてんじゃねぇぞ！　ほら、さっさと「あの指輪」使え！』
捲し立ててくるダイスに負け、ロードは渋々とホルダーから赤い指輪を取り出し、ベルトを操作する。
《シャバドゥビタッチヘンシーン！　シャバドゥビタッチヘンシーン！……》
「はぁ……いくぞ、ダイス」
『っしゃあ！　やっと俺の出番だ！』
待機音と嬉しそうなダイスの声を聞きながら、ロードは『ロードウィザードリング』とその指輪を取り替え、そしてベルトへかざす。
《ナイト・カモーン‼？》

そして左手を横にかざすと赤い魔法陣が展開し、ロードの体を通過していく。

《ロード！　エンチャント！　クラスナイト‼？》

全身を通過する頃には、ロードの姿は変わっており。

銀色の装甲はところどころに赤の装飾が付け加えられ、複眼は鮮血を思わせる赤に染まる。そして左手には、ダイスが持っていたような刀身が赤黒い西洋剣が。

これがファントム『ダインスレイブ』の力を宿したロードの新しい姿。

――名をロード『クラスナイト』。

『さーて、ぶった斬るぜぇ！』

先ほどまでとは打って変わって意気揚々になるダイの声を聞きつつ、ロードは剣を構えカルキノスへと立ち向かった。